

読書悠々日記

(2017年)

久恒啓一

目次

2017年1月	5
浅田次郎「パリわずらい 江戸わずらい」(小学館文庫)	5
三熊花顛,伴蒿蹊,中野三敏「続近世畸人伝」(中央公論新社)	6
井上智洋「ヘリコプターマネー」(日経新聞出版社)	6
池澤夏樹「知の仕事術」(インターナショナル新書)	7
小川軽舟「俳句と暮らす」(中公新書)	8
2017年2月	9
成毛眞「本棚にもルールがある—ズバ抜けて頭がいい人はなぜ本棚にこだわるのか」(ダイヤモンド社)	9
レイ・カーツワイル「ポスト・ヒューマンの誕生—コンピュータが人類の知性を超えるとき」(NHK出版)	9
寺島実郎「シルバー・デモクラシー—戦後世代の覚悟と責任」(岩波新書)	10
池澤夏樹「叡智の断片」(集英社文庫)	12
井上智洋「人口知能と経済の未来 2030年雇用大崩壊」(文春新書)	13
ジョージア・ブラッグ「偉人は死ぬのも楽じゃない」(梶山あゆみ訳・河出書房新社)	13
伊藤元重「東大名物教授がゼミで教えている人生で大切なこと」(東洋経済新報社)	14
梅棹忠夫「知的生産の技術」(岩波書店)	14
2017年3月	15
安岡正篤「運命を開く—人間学講話」(プレジデント社)	15
安岡正篤「人物を創る—人間学講話『大学』『小学』」(プレジデント社)	15
田俊明「姥捨て山繁盛記」(日本経済新聞出版社)	16
小中陽太郎「上海物語 あるいはゾルゲ少年探偵団」(未知谷)	16
高峰秀子「おいしい人間」(潮出版社)	16
2017年4月	17
森村誠一「写真俳句のすすめ」(朝日文庫)	17
クラウド・シュワブ「第四次産業革命」(日本経済新聞出版社)	18
坂村健「IoTとは何か—技術革新から社会革新へ」(角川新書)	20
幸田露伴「努力論」(岩波文庫)	21
渡部昇一「名著で読む 日本史」(扶桑社)	21
2017年5月	23
マルチロ・マッスミーニ:ジュリオ・トノーニ『意識はいつ生まれるのか—脳の謎に挑む統合情報理論』(亜紀書房)	23
丸山真男「日本の思想」(岩波新書)	23
司馬遼太郎「街道をゆく モンゴル紀行」(朝日文庫)	24

安岡正篤「禅と陽明学」(プレジデント社)	25
井上靖「蒼き狼」(文藝春秋)	25
2017年6月	26
土井英司『エグゼクティブ・ダイエット』(マガジンハウス)	26
浅川保「偉大な言論人 石橋湛山」(山日ライブラリー)	27
安岡正篤「易と人生哲学」(致知出版社)	28
司馬遼太郎「草原の記」(新潮文庫)	29
2017年7月	30
村井重俊「街道についてゆくー司馬遼太郎番の六年間」(朝日文庫)	30
宇野千代「生きていく私」(角川文庫)	31
アインシュタイン・フロイト『人はなぜ戦争をするのか』(講談社学術文庫)	33
コリン・パウエル「リーダーを目指す人の心得」(飛鳥新社)	34
成毛真「AI時代の人生戦略」(SB新書)	35
佐藤愛子「九十歳。何がめでたい」(小学館)	36
2017年8月	37
寺島実郎「ユニオンジャックの矢」(NHK出版)	37
日野原重明「思うままに生きるー100歳の言葉」(PHP)	38
稲見昌彦「スーパーヒューマン誕生！」(NHK出版新書)	39
土門拳「死ぬことと生きること」(みすず書房)	39
司馬遼太郎「韃靼疾風録(上)」(中公文庫)	40
司馬遼太郎「断端疾風録」(中公文庫)	41
2018年9月	41
小林秀夫「何がベンチャーを急成長させるのかー経営チームのダイナミズム」(中央経済社)	41
中澤日菜子「ニュータウンクロニクル」(光文社)	42
岡田英弘「世界史の誕生ーモンゴルの発展と伝統」(ちくま文庫)	43
杉山正明「モンゴル帝国と長いその後」(講談社学術文庫)	44
塩野七生「日本人へーリーダー編」(文春新書)	44
池上彰・佐藤優『大世界史』(文春新書)	45
伊藤洋一「情報の強者」(新潮新書)	45
高峰秀子「おいしい人間」(潮出版社)	45
志村ふくみ「一色一生」(講談社学芸文庫)	46
山本周五郎「泣き言はいわない」(新潮文庫)	47
楠木新「定年後」(中公新書)	48
紀田順一郎「蔵書一代」(松籟社)	48
東京やなぎ句会編「友あり 駄句あり 三十年」(日経新聞社)	49

2017年10月	51
山野正義「ジェロントロジー」(IN通信社)	51
斉藤博子『間門園日記(まかどえんにつき)ー山本周五郎ご夫妻とともに』(深夜叢書社)	52
中村圭介「絶望なんかしてられないー救命救急医ドクター・ニーノ戦場を駆ける」(荘道社)	53
人間の記録89「東郷青児」(日本図書センター)	55
『日本の名随筆』シリーズ「『人間』(多田富雄編)」「『定年』(山田智彦編)」(作品社)	55
加藤秀俊著作集10「人物と人生」(中央公論社)	56
関厚夫「次代への名言ー時代の変革者編」(藤原書店)	57
丹羽宇一郎「死ぬほど読書」(幻冬舎新書)	57
原田國男「裁判の非情と人情」(岩波新書)	58
戸板康二「ちょっといい話」(文藝春秋)	59
2017年11月	60
戸板康二「あの人この人 昭和人物誌」(文春文庫)	60
橋本卓典「捨てられる銀行2 非産運用」(講談社現代新書)	61
磯田道史「『司馬遼太郎』で学ぶ日本史」(NHK出版新書)	62
山本周五郎「泣き言はいわない」(新潮文庫)	63
長井実編「自叙益田孝翁伝」(中公文庫)	64
2017年12月	65
山本周五郎「ながい坂(上)」(新潮文庫)	65
児玉博「テヘランからきた男ー西田 厚聡と東芝機械」(小学館)	66
山本周五郎「ながい坂(下巻)」(新潮文庫)	67
浜口雄幸「随感録」(講談社学術文庫)	68

2017年1月

浅田次郎「パリわずらい 江戸わずらい」(小学館文庫)

日本航空の機内誌に長く連載しているユーモアエッセイをまとめた第三弾。

搭乗するたびにいつも読むのを愉しみにしている。それがまとまったので楽しく読んだ。内容は旅もの、ペンクラブ関係、自虐ネタ、食べ物談義、、、など多彩である。この連載は百数十回、十余念続いている。

浅田によれば、小説家は嘘つきだが、随筆家は正直者であるから、この二つを使い分けるのはジキルとハイドのような二重人格ということになる。

内容ではなく、ベストセラー作家で日本ペンクラブ会長でもある同世代の浅田次郎の日常と習慣と考え方が、このエッセイでうかがえる。以下、そこを拾ってみたい。人間、浅田次郎の姿がみえてくる。

- ・ 旅慣れるほどマイナス思考がたくましゅうなり、いきおい少しずつ荷物が増える。
- ・ 年齢とともに時差ボケがひどくなった。
- ・ 2008年に狭心症の治療を受ける。
- ・ 若い自分から一夜漬けの王者である。
- ・ 浅田ハゲ次郎という陰口は耳にしている。しかし浅田デブ次郎とは呼ばせたくない。
- ・ 地方出張時にはかならず朝食前にホテルの周辺を散歩する。
- ・ 家は都心から離れているのでスケジュールは一日にまとめる。
- ・ 東日本大震災後は、怖くて何も書けず、何も語れなかった。文学の無力を痛感。
- ・ 社交的な人物と見せながら根が暗い。
- ・ 引っ越しは18回。
- ・ 小説家という職業はまじめに働けば働くほど運動量は削減される。まじめな小説家はデブだ。
- ・ 一日はまずスーパーマーケットの折込み広告の精査から始まる。
- ・ 旅ジイ
- ・ 海外のホテルには30日、国内はその倍くらい泊まっている。
- ・ よいものを選んで長く使う、がモットー。
- ・ 夢をみる名人。夜中にトイレに立ち、ベッドに戻った後はちゃんと続きを見る。
- ・ 月に何度かは神田の古書店街で過ごす。うまい昼飯を食う。
- ・ 理解力と応用力は決定的に欠くが、記憶力には自信がある。

三熊花顔,伴蒿蹊,中野三敏「続近世畸人伝」(中央公論新社)

校注の中野三敏によれば、江戸の壮年期である享保の改革から寛政の改革までの85年を視野に入れた18世紀の实在の人物を一種の香気に包んで提示してくれる絶妙の書である。

「畸人」とは誰か。「莊子」の中で子貢の「敢えて畸人を問う」に対して孔子は「畸人は人に畸にして天にひとし」と答える。俗人からみれば奇人・変人だが自然の法からみれば理想的な人間をいうのだ。歩むべき道を歩む人は汚れきった俗世間では一種の畸人になる。この書は超俗・世俗の両面にかかわる書物である。

人選は生存中の人物は省いている。「なべて人の一生は棺をおほふて後定むべければ也」だからだ。

孔子の人物評は、「中行の士」(中庸を得た聖人)「狂者」(志は高いが行いが中庸を欠く人)「狷者」(立派ではあるが他に厳しすぎる人)「郷原」(上辺の体裁ばかりを作る人)の順。

畸人伝は、中江藤樹、貝原益軒から始まる。僧侶、女、尼、遊女、各地の畸人を紹介している。女が多いのは意外だった。

貞烈の婦人。孝心の人。父のために身を売る娘。売茶翁。隠士。直き人。蓄財せぬ人。俳諧行脚者。医者。速修を受けざる人。妬心なき婦人。陰徳者。無我の道人。仙人、、、など89人。こういう人が畸人なのだ。

「もともとせも猶あきたらず行末をおもふころぞ物笑ひなる」

「女ほどめでたきものは又もなし釈迦や達磨をひよいと産」

畸人は奇人ではない。江戸的な感性の中であるべき人間の姿をであった。高僧・偉人に始まりやがて狂者、畸人まで紹介したこの書は刊行時から明治以降も関連書が出ており長く世間の評価が高かった。人々が自分の境遇に引きつけて模範にすべき、モデルの提示だったのである。

井上智洋「ヘリコプターマネー」(日経新聞出版社)

ヘリコプターマネーは、統合政府(政府や中央銀行)が空からお金を降らせるかのように、貨幣を市中に供給し、景気を浮揚させる経済政策である。具体的には政府による現金給付、日銀に買いとらせた国債を財源とした財政支出、減税などの金融政策である。それによって景気がよくなり失業が減る。インフレ・ターゲットを採用すべきだ。統合政府の貸し借り自体には意味は無く、国は借金を返す必要は無く、償還期限が来たら借り換えればよい。

不況の始まりは1991年、デフレの始まりは1998年。日銀が供給するお金が民間銀行で滞留し、企業に出ていかず、世の中に十分に行き渡っていない現状を打破する政

策だ。デフレ不況の原因はヘリコプターマネーの量が足りないからだ。信用創造の罫というデッドロックから脱却せよ。

政府の貨幣発行益は打ち出の小槌だ。2-3%の緩やかなインフレまではヘリコプターマネーを実施すべきだ。定額給付金、児童手当など。

銀行は企業へ貸し出すことによって利益が出ないので利息を払えなくなる。国民は利子を得たかったらリスク資産である社債や投資信託を購入するしかない。リスクがなく流動性がある預金に利息がつくというのは金融の原則に反している。

汎用AIが実現する 2030 年頃には第四次産業革命が起こる。雇用の大部分が消滅するとともに、爆発的な経済成長が可能となる。汎用AIを導入した国としない国に大きな格差が生まれる。第二の大分岐である。この時代には失業対策としてベーシックインカムを導入すべきだ。税金を使った固定ベーシックインカムとヘリコプターマネーをベースとした変動ベーシックインカムも必要になる 2 階建てBIである。

池澤夏樹「知の仕事術」(インターナショナル新書)

現在刊行中の池澤夏樹個人編集「日本文学全集」全 30 巻を毎月買っているので、馴染みのある作家である。一度、講演をオーディブルで聴いたことがあり、その後数冊の小説を読んでいる。

池澤がノウハウを公開した軽い読み物だ。

- ・ 新聞書評を 30 年続けている。計 1000 冊を超える。最初の 3 行でどうい本であるか、つかみを入れる。内容やあらすじを説明。どこがいいかの勘所を伝える。最後は粹に締める。
- ・ サイト「日本の古本屋」でたいてい手に入る。
- ・ イギリス人は伝記が好き。バイオグラフィーを示すBという棚があるくらい。「キュリー夫人伝」(エーヴ・キュリー)。「ガロアの生涯――神々の愛でし人」(レオポルト・インフェルト。日本評論社)。
- ・ 中野重治記念文庫(福井県坂井市丸岡町)。
- ・ 取材。見たもの、思いついたアイデアなどのキーワードをメモ帳に。その日の晩か明け方にパソコンで詳しいメモに再構成。日付、行動、見たもの、聞いたもの、誰に会ったか、どんな話を聞いたか。展示物とプレートも撮影。知的生産は技術によって支えられている。テクノロジーが変わったら生産方法も変わる。
- ・ iPhone6 プラスと MacBook Air。消せるタイプの三色ボールペン(フリクション)。トランクはRIMOWA。
- ・ 海外には「ロンリー・プラネット」を持参。650 タイトル。「ギャップイヤー」の巻。「BLUE GUIDE」も役に立つ。遺跡などが丁寧に記述。日本語訳はない。
- ・ 講演:メモをつくる。全体の流れ。数字、年号、人名。

- ・ 海外サイト:ウィキの英語版は極めて充実。ガーディアン、ニューズウィーク日本版サイト。
- ・ 引用句辞典。英語版も楽しい。1冊に数千項目。「叡智の断片」(文庫)。
- ・ すぐに絶版となるから防護策として電子出版。だれでも読めるようにしたい。

・森健 「小倉昌男 祈りと経営:ヤマト「宅急便の父」が闘っていたもの」(小学館)

宅急便を発明した小倉昌男は、現役引退後に私財46億円を投じて「ヤマト福祉財団」を創設し、晩年は障害者福祉に取り組んだ。それはなぜか、を丹念な取材で追った優れたノンフィクションである。

ビジネスで大成功した小倉は家庭では敗北していた。妻と娘との問題に懊悩する日々であった。この作品は第22回小学館ノンフィクション賞を受賞している。この賞の歴史上初めて選考委員全員が満点をつけた作品だ。読み終えた今、その評価に納得する。

作者の森健は 2012 年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している気鋭のライターだ。今後の作品に注目したい。

2000 年代のはじめの仙台時代、日経ベンチャーという雑誌で連載を持っていたことがある。著名な経営者にインタビューし、ビジネスモデルと人物像を明らかにするという企画だった。

ユニクロの柳井社長、セコム創業の飯田最高顧問、パソナの南部社長といった方々が対象だった。ヤマトの小倉さんも予定していたが、断られた記憶がある。

この本を読むと、とても応じる環境と心境にはなかったことがわかる。

今「読む」と書いたが、正確には「聴いた」である。febe でオーディオブックで8時間24分11秒かかった。通勤の往復で聞いていたのだが、推理小説の謎解きに似て楽しんだ。小倉昌男という人物の知られざる孤独な人生を想った。

小川軽舟 「俳句と暮らす」(中公新書)

著者は 55 歳のサラリーマン。単身赴任生活も 5 年を越えた。

藤田湘子の「鷹」主宰を引き継ぐ。毎日新聞俳壇選者などを担当する実力俳人だ。

平凡な日常をかけがえのない記憶として描き出すのが俳句であるという考えである。

「飯を作る」「会社で働く」「妻に会う」「散歩をする」「酒を飲む」「病気で死ぬ」「芭蕉も暮らす」という章構成で、俳句の楽しみをしみじみと語る逸作である。

- ・ 食材には旬がある。だからほとんどの食材は季語である。台所に立って四季の移り変わりとともにある日常を味わう。春めくや水切り籠の皿二枚
- ・ サラリーマンあと十年か更衣

- ・ 男は妻を詠むと真実の自分が出る。女は夫を離れてこそ真実の自分が出る。妻来る一泊二日石露の花 職場中関西弁や渡り鳥 暑き日の熱き湯に入るわが家かな
- ・ 俳句と暮らす人の散歩は、次に来る季節を迎えるための散歩なのである。俳句の勉強は、まずは歳時記をひもといて季語を覚えることである。平凡な言葉かがやくはこべかな
- ・ 俳句という文芸には読まれるというプロセスが不可欠だ。置酒飲語。青桐や妻のつきあふ昼の酒
- ・ 病中吟。俳句は病気と相性がよい。俳句に支えられる。死ぬときは橋置くやうに草の花
- ・ 一年の未来ぶあつし初暦

2017年2月

成毛眞「本棚にもルールがある——ズバ抜けて頭がいい人はなぜ本棚にこだわるのか」(ダイヤモンド社)

日本マイクロソフトの社長などを歴任した著者は、2011年にノンフィクションの書評サイト「HONZ」を開設している。「本は10冊同時に読め！」など読書の関する著作も多い。

年間100冊を読んでいた著者は、「HONZ」開設以降は、200冊以上になった。ベストセラーではなく、「他の人が読まない面白い本」を物色する。

この本は本棚に着目している。3つの本棚が必要で、新鮮な本棚(常時動いている。週一で入れ替え)、メインの本棚(「サイエンス・歴史・経済が最低必要)、タワーの本棚(事典・辞書、年表、地図、図鑑、名言集)だ。著者のメインの歴史は、「西洋近代史」と「江戸時代」とジャンルを絞っている。

レイ・カーツワイル「ポスト・ヒューマンの誕生——コンピュータが人類の知性を超えるとき」(NHK出版)

「生物の限界を超え2045年、人類はついに特異点(シンギュラリティ)に到達する」。

ポスト・ヒューマン誕生——コンピュータが人類の知性を超えるとき

作者: レイ・カーツワイル, 井上健, 小野木明恵, 野中香方子, 福田実 出版社/メーカー: 日本放送出版協会

世界屈指の発明家、思想家、未来学者。さまざまの出来事を予言してきた。現代のエジソンとも呼ばれている。アメリカの発明の殿堂に名を連ねている。12 の名誉博士号を持つ。これが著書だ。1947 年生まれのベビーブーマー。

5 歳で発明家になると決めたこの人物は、どのような未来がくるかを探り、魔法である未来のテクノロジーを考慮して、アイデアを練り、絶好のタイミングで具体的な発明を行って成功してきた。その人が語る未来には誰もが真摯に耳を傾ける。

シンギュラリティ(特異点)を提唱し、世界中で話題になった。それは生物とテクノロジーが融合する臨界点であり、その時点以降、人類は人間ではあるが、生物を超越した存在になっている。その臨界点が 2045 年に来るといふ。

21 世紀前半は 3 つの革命が同時に起きている。遺伝学、ナノテクノロジー、ロボット工学だ。遺伝学で寿命が劇的に伸びる。ナノテクノロジーで肉体と脳を再設計できる。ロボット工学で人間よりすぐれた知能を持つロボットが誕生する。

人間の虚弱な人体は、丈夫で有能なバージョン 2.0 に変化する。老化せず永遠に生きられる。仕事と遊びはあらゆる種類の知識の創造に向けられる。2030 年代から 2040 年代には人体はバージョン 3.0 になるだろう。人間の可塑性が拡大し身体を自由に変えられる。他人になり、人格も好きなように決められる。感情も共有される。心が拡大する。思考力が格段に向上する。脳と脳との無線通信が可能になる。医学の進歩しだいで平均寿命は 150 年、500 年、1000 年に及ぶ可能性がある。誰もが最高級の知識や教育を享受できる。最貧階級はいなくなる。仕事と遊びの区別がなくなる。

人間そのものが徐々に、しかし確実に、生体から非生物的な存在に変わっていく。こなってくると「意識」がテーマになる。意識(主観)の問題は科学によっては完全に解決できない。哲学や思想が重要になる。進化は神の概念に向かって進んでいる。

リスクは大きい克服していかなければならない。防御技術への大幅な投資の拡大が必要で、その大部分は抗ウイルス薬と治療だ。

寺島実郎 「シルバー・デモクラシー—戦後世代の覚悟と責任」(岩波新書)

戦後世代の先頭を走る団塊世代の代表選手である著者が、1980 年の中央公論『われら戦後世代の「坂の上の雲」』から始まる論考を積みあげながら、その結末として浮上

した「シルバー・デモクラシー」の現実と参画型社会構築の熱を込めて語った書。以下、問題意識と解答への試み。

戦後 70 年の現在の課題:まっとうな日本を残すために必要なこと。

- ・ 健全な産業主義の回復
- ・ アジアとの信頼関係の構築とアメリカとの関係の見直し
- ・ 国家主義への郷愁を讃えた民主主義からの脱却
- ・ 第 1 章:戦後民主主義とは何か？
- ・ 戦後民主主義は「与えられた民主主義」という限界の中で、民主化の前進があった。代議者の定数削減と任期制限など代議制の錬磨が必要。
- ・ 国権主義的国家再編と軍事力優位の国家への回帰を試みる勢力という明確な敵に対峙していく。
- ・ 第 2 章:1980 年「われら戦後世代の「坂の上の雲」」に見る戦後世代の自画像？
- ・ 戦後世代＝都市住民＝新中間層。やさしいミーイズム。論理性と公共性の希薄した世代。
- ・ 80 年代を創造できるのか？創造力があるのか。協調と連帯は本物か。主張を説明せよ。
- ・ 「個」を基軸とした社会構想を！国家が踏み込むべきでない領域の設定。代議制民主主義に代わる新しい政治意思決定システムの模索。豊かさ以後の経済体系。諸課題を同時解決するようなシスレムの解決を。アジアとの真の連帯。
- ・ 第 3 章:21 世紀に入っての「それからの団塊世代」は？
- ・ 2008 年
- ・ 団塊世代は、私生活主義(ミーイズム)と経済主義(拝金主義)。
- ・ 社会的にいかに生きるか。何かを後代に残す。
- ・ 2015 年
- ・ 軽武装経済国家の日本。分配の公正、産業と技術の国。
- ・ 最大の課題は、アメリカとの関係の再設計だ。
- ・ 第 4 章:シルバーデモクラシーを支える社会構造基盤は？
- ・ 関連した憲法と沖縄は、戦後日本の将来に向けてごまかしのきかない課題。
- ・ 中間層の貧困化の進行と高齢者の二極化。
- ・ 多世代共生、参画、多元的価値が幸福老人を増やす。
- ・ 第 5 章:世界のデモクラシーの現実は？日本のデモクラシーの進むべき方向は？
- ・ 民主主義は資本主義を制御できるのか？
- ・ トランプ:「父の威光の中でニューヨークのビルの再開発を進める目立ちたがり屋、またスキャンダルまみれの好色家。」「父親の威光と支援でビルの再開発やカジノ経営で「金ピカのアメリカ」を象徴するように生きてきた男であり、人生を貫く価値は

「DEAL(取引)」である。、思慮も哲学もない反知性的存在、

- ・ 公的マネーで国家資本主義的様相の日本経済。
- ・ 日本のような産業国家は「経済の金融化」に振り回されることを避けよ。
- ・ 第6章:参画型高齢化社会の土台作りの構想は？
- ・ 民主主義を確実に根付かせること、いかに有効に機能させるか。
- ・ 後代負担を押しつけて去ることを避けよ。健康寿命。
- ・ ニューファミリーの幻想、戦後民主主義の担い手という期待は霧消。
- ・ 膨大な単身世帯が郊外のコンクリート空間に収容する社会構造。
- ・ 都市中間層の社会参画への構想。支える側、充実した老後、社会参画の実感。システムとしての農業への参画、
- ・ 戦後世代の共通体験。地球は宇宙空間の一つ。イデオロギー対立の限界。情報通信環境の劇的進化。
- ・ これからが正念場！
- ・ この本では解答はまだ体系にまではなっていないが、いずれシルバー・デモクラシーに関するよく練られた解答が出てくるだろう。
- ・ 自らが属す団塊の世代への期待と失望の連続の中で、なお希望を棄てること無く解答を見いだそうとする姿勢には強く共感する。戦後世代の責任を自覚し、覚悟をもって現実に向き合うことが必要だ。

池澤夏樹「叡智の断片」(集英社文庫)

著者の池澤夏樹は3年間ほど「引用句」にはまっている。自分が思いつけないような気の利いた言葉を蒐集する愉しみである。英語圏にはユーモラスな素材が多いという。

「良い戦争というものはないし、悪い平和というものもない」(ベンジャミン・フランクリン)
「成功は生活を楽にしてくれる。でも、生きることを楽にしてはくれない」(ブルース・スプリングスティーン)

「失敗したとは思わない。うまくいかないやり方をもう一つ見つけたのだと思う」(アンディ・エルソン)

「こんなに長生きするとわかっていたら、もっと身体に気をつけたのに」(ユービー・ブレイク)

「民主主義というのは教育のない連中がやる政治。貴族制とは悪い教育を受けた連中がやる政治」(チェスタトン)

「歴史とは歴史事象の記述。その大半は虚偽ないし取るに足りぬことであり、書き手の多くは統治者すなわち悪党であるか、軍人すなわち馬鹿である」(アンブローズ・ビアス)

「人生には二つの法則がある。一方は一般的に通用し、他方は特定の個人にのみ適用される。誰もが、努力をすれば最終的には求められるものを得られる、というのが一

一般的な方の法則。そして、たいていの人はこの法則の例外にあたる、というのが二番目の法則」(サミュエル・バトラー)

「景気後退ではあなたの知り合いが失業する。不況ではあなたが失業する」(トルーマン大統領)

井上智洋 「人口知能と経済の未来 2030 年雇用大崩壊」 (文春新書)

副題は「2030 年雇用大崩壊」である。以下、要旨。

2030 年までは、自動翻訳機、自動運転車、自動通訳、、、など特化型人工知能によって社会が変わっていく。そして 2030 年頃に汎用人工知能が開発され、経済や社会は大きく変わる。汎用AIが誕生し、そして 2045 年にシンギュラリティが訪れる。

その世界は労働から解放されるユートピアか、極端な貧富の差のあるディストピアか？ 機械との競争による技術的失業で被害を被るのは中間所得者だ。肉体労働の次には事務労働が代替される。企画・研究開発などの頭脳労働の高所得者は、会計士や弁護士などを除き生き残るだろう。

身体を持たないという「生命の壁」があり、人間が与えた範囲でしか活動できないから、すべてを任せるほどにはAIは発達しない。

2030 年の汎用AIの出現あたりから第 4 次産業革命が起こってくる。アメリカの次の覇権国家(ヘゲモニー国家)アメリカか、ドイツか、日本か。機械化経済で第二の大分岐が起こり、2060 年頃に移行が終わる。

2030 年には就業者が今の半分になり、2030 年から 2045 年には、1 割しか労働しない社会になるかもしれない。

AIに負けない領域とは何か？ 他人との通有性が必要な職業。CMH。

クリエイティブ系(創造性):小説、映画、発明、企画、研究、、、。

マネジメント系(経営):工場・店舗・プロジェクトの管理、企業経営、、、。

ホスピタリティ系(もてなし):会議、看護、保育、インストラクター、、、。

労働から解放される社会では収入の道がなくなる。全国民に定額を給付するベーシックインカムが有効だ。行政コストをかけずに毎月口座に振り込む。月 7 万円のBIは 100 兆円の財源、現在の所得保障 36 兆円に 25%の新所得税 64 兆円でまかなえる。BIがあればユートピアになる。

ジョージア・ブラッグ 「偉人は死ぬのも楽じゃない」 (梶山あゆみ訳・河出書房新社)

偉人たちはどのように生き方、で長く記憶されているが、有名な人がどのように、具体的にどのようなプロセスで死んだかを調べた不思議な本である。

体が爆発する。剣で刺される。毒にやられる。通風。結核。鉛中毒。ギロチン。放射

線、、、、。

迷信にまみれた時代の治療はかえって体を痛めつけた。現在の医療の発達に感謝する。

19人は、以下。

ツタンカーメン。カエサル。クレオパトラ。コロンブス。ヘンリー8世。エリザベス一世。ポカホンタス。ガリレイ。モーツァルト。マリー・アントワネット。ワシントン。ナポレオン。ベートーベン。エドガー・アラン・ポー。ディケンズ。ガーフィールド。ダーウィン。キュリー夫人。アインシュタイン。

伊藤元重「東大名物教授がゼミで教えている人生で大切なこと」(東洋経済新報社)

febe で入手したオーディオブック(5時間21分29秒)を1.5倍速で聴くと3時間47分になる。通勤の往復でウォーキングしながら聴き終わった。線を引きながら読めないが、キーワードをメモしながらならこなせる。こういう自己啓発本はそれでいい。

以下、受信したキーワード。

- ・ 加藤周一『読書論』。本棚に100冊。goodnote。連載がいい(キーワード一つ。アウトプット)。1日1冊トレーニング。kindle。東大生協。
- ・ 資産分散。3つのテーマの同時進行。同時並行読書。目指すべき人。差別化。毎日一つ新しいこと。シナジーという差別化。年間200本。高質・多量の情報。ウォーキングエコノミスト。
- ・ ブリュエゲル。フォーリンアフェアーズ日本版。杉浦明平。森嶋通夫の3段階ロケット論。ギア・チェンジ。

梅棹忠夫「知的生産の技術」(岩波書店)

この本はいつも新しい。目からではなく、耳から情報が入るのも新鮮だ。

- ・ 拙著「団塊坊ちゃん青春記」(多摩大出版会)が研究室に届いたというニュース。どんな本になっているか、楽しみだ。
- ・ 「名言との対話(命日編)」の原稿整理が終了。
- ・ 「週刊ポスト」の取材が急遽入ったため、九段サテライトの会議の後に文庫カフェで30分ほどの取材を受ける。生き方をめぐる企画記事への識者のコメントという立場。来週月曜日発刊。

2017年3月

安岡正篤「運命を開く一人間学講話」(プレジデント社)

人間学。耳で聞き、目で読む。

・人間ができ、教養ができてこない、よい挨拶よい辞令というものは出てこないものです。こういう学問が大学にあってもよいと考えます。

・説文学

・才が徳より優れている人間を小人、反対に徳が才より優れている人間を君子と言い、才徳二つとも大いに発達している者を聖人、才徳ともつまらない人間を愚人と言っております。

・「常を養う」のが尋常教育であります。即ち人格を鍛錬陶冶して、その上に知識・技術をつける。

・「道德教育は、、、自らお手本になるということです。身を以て垂範する。」

・道德と宗教。東洋哲学ではこれを一つにして「道」という。

・中年の危機

・百尺竿頭一步を進む

・水戸光圀「大日本史」は南北朝で終了。それを受けて飯田忠彦は「大日本野史」で近代史を叙述。貧乏サラリーマンが38年の歳月をかけて独力で補った作品。(江戸末期の歴史学者・勤王家。周防(すおう)の人。「大日本史」を読んで感奮、独力で「野史」二九一巻を編む。桜田門外の変で取り調べを受け、憤激して自殺。有栖川家に仕える。1798年生まれ。万延元年(1860)歿、62才。)

・「重職心得箇条」(佐藤一斎)

・人間は陶冶次第です。「陶」は土をねり焼いた焼き物、「冶」は鉄を鍛えて鉄器をつくる金属の精錬。

・私淑する人物と、座右の愛読書。

・烈士暮年、壯心已まず

安岡正篤「人物を創る一人間学講話『大学』『小学』」(プレジデント社)

人間学講話シリーズ。「小学」と「大学」を講義。本も注文。

小学は、日常の立ち居振る舞いを論じたもの。聖人の善行や箴言、実践的教訓。

大学は、経学(思想)を学ぶ。修己治人。「論語」「孟子」「中庸」とあわせて四書。三綱領「明德」「親民」「至善」。八条目「格物」「至知」「誠意」「正心」「修身」「齐家」「治国」「平天下」。

田俊明「姥捨て山繁盛記」(日本経済新聞出版社)

第8回日経小説大賞受賞作である。

高齢化。政権交代。ダム。認知症。雪山での自殺。施設。

ワイン。庭園写真美術館。奇跡の村。自給自足経済。

世代を超えた結束。使命感、、、

「数珠つなぎにうまくいく時のわくわく感がある」「映画的で楽しく読める」「一見、夢物語風だが、社会的な視点が据えられている」などが審査員の評だ。

社会問題と生き方をリンクさせた健全な筋書きの小説だ。

著者は1953年生まれ。東大野球部の遊撃手として東京六大学野球で活躍。卒業後は総合商社、テレビ局に勤務し、2013年定年退職。

受賞インタビューでは、60歳の定年後、日経小説大賞をターゲットにして每一作ずつ書いていこうと決めたと語っている。昨年は最終候補にあがっている。

定年後の過ごし方として、なかなか興味深い。

「書斎の窓から見える景色は毎日同じでも、物語を書き始めればその世界に入っていくことができます。雪の舞う箱根路を疾走するランナーの高揚感、ぶどう畑を見下ろす峠に一人佇(たたず)む認知症を患った男の喪失感、江戸の町の喧噪(けんそう)の中を分厚い本を抱えて速足で歩く男の使命感。いくつもの人生を疑似体験できるのは、小説を書く醍醐味です。」

小中陽太郎「上海物語 あるいはゾルゲ少年探偵団」(未知谷)

「老人は夢を見、若者は幻を見る」(ヨエル書)。

著者は「少年の夢と老人の幻」を書いた。1930年代から始まる時代と、21世紀の現在を自由に往復しながら、「ゾルゲ事件」を題材に自由で奔放で真面目で複雑な、そして魅力的な物語を紡いでいく。

再会と別離の織りなす運命。20世紀の少年から、作家と平和運動の葛藤とペンクラブ、そして21世紀の奇妙な現実と向き合う老人の視界。

小中陽太郎の自伝的ハイパー・スパイ小説。

高峰秀子「おいしい人間」(潮出版社)

神保町の古本屋街をブラブラして、本を買い込む。

その時の問題意識という目があるからだろうか、向こうから本のタイトルが飛び込んできた。一つは「漱石の俳句」、もう一つは女優・高峰秀子のエッセイだ。

昨日の「名言との対話」で高峰秀子を書いたのだが、そこで彼女のエッセイが素晴らし

いことを発見した。その目が「おいしい人間」を見つけた。本屋を巡る愉しみはここにある。

エッセイでは筆者の人柄、日常の生活、周囲の人物評などが出てくるので、楽しい。この人は女優であり、夫は映画監督であったので、著名な俳優などが出てくる。

丹下左膳を演じた大河内伝次郎については、次のように書かれている。

「優れた俳優は、物の教えかたも要領を得て上手い」「が、大河内さんだけは本身を使う」「不器用な人で、おまけにド近眼」「きびしく名刀のような人だった」、。

司馬遼太郎「先生は美男である(いささか蒙古風)」。安野光雅「先生も美男である(いささかインディアン風)」。こういう対比や、人間性があらわれるエピソードを書く筆致は実に楽しい。

自分についてはどうか。

「年中無休、自由業」「白黒をハッキリさせたい性質(たち)の私」「女優の仕事は、そと目には華やかでも、私にいわせれば単なる肉体労働者である」「30歳のオバサン女房が夫をつなぎ止めておきには「美味しいエサ」しかない」「なにごとにつけても、自分自身の眼や舌でシカと見定めない限りは納得ができない、という因果な生まれつきの私」「食いしんぼう」「春先には蒨のとうの風味を味わい、夏には枝豆の爽やかな緑を楽しみ、秋には茸、冬には鍋ものと、ささやかでも季節そのものをじっくりと楽しむ」「私のヒイキは、なんといっても「内田百閒」だった」「私は、自分が下品なせいか、上品なものに弱い」「人づきあいはいはしない。物事に興味を持たず欲もない。性格きわめてぶつきらぼう」「独断と偏見の固まりのような人間」「どんな知人友人でも死に顔だけは見ないことにしている」

400本の映画に出演した大女優は、名エッセイストだったことを納得した。沢村貞子もそうだったが、「目」がいい。

2017年4月

森村誠一「写真俳句のすすめ」(朝日文庫)

写真と俳句が一体となった写真俳句はいいかもしれない。

人生の記録として凡句を重ねよう。

- ・写真を撮り、あとでじっくり観察して俳句をつくる。
- ・俳写同格
- ・時間と空間
- ・悠久の歴史。深遠な心理描写。
- ・句会にはでない。他人の句を批評しない。名句をたくさん読む。歳時記に親しむ。俳

句は足でつくる。

- ・句境は持続性がある。句材は至るところに。
- ・俳人にとって俳句に勝る人生の記録はない。人生の記録であるから凡句でも構わない。
- ・写真俳句の特徴は、抽象化の極致である世界最短詩型の俳句と、具象的な写真をジョイントしたものである。
- ・350年近い歴史の俳句と最先端の機器を合体して写真俳句をつくる。
- ・人事。日常。旅。アウトドア。1万歩。

クラウス・シュワブ「第四次産業革命」(日本経済新聞出版社)

「世界経済フォーラム」、いわゆるダボス会議が予測する未来の姿が書かれている。

著者のシュワブはダボス会議の創設者として世界の経済と政治を40年間にわたって観察し続けてきた人物。

第一次産業革命(1760年代～1840年代):蒸気機関の発明と鉄道建設。機械による生産の到来。

第二次産業革命(19世紀後半～20世紀初頭):電気と流れ作業の登場。大量生産。

第三次産業革命(1960年代～1970年代)の半導体、メインコンピュータ。1970-1980年代のパソコンの開発と1990年代のインターネット。コンピュータ革命。

現在は21世紀から始まった第四次産業革命の入り口にあり、これはデジタル革命である。偏在化しモバイル化したインターネット、小型・強力なセンサーの低価格化、AI、機械学習が特徴。大変革。根底からシステムが変革される。大きな利益と不平等の悪化。懸念の第一はリーダーシップ不足と変革への理解不足。第二は共通構想と説明がないこと。

物理的なメガトレンド:自動運転車。3Dプリンタ。先進ロボット工学。新素材。

デジタルなメガトレンド:IOT。センサーでモノをつなぐ。細かい監視と最適化。

生物学的なメガトレンド:遺伝学イノベーション。合成生物学。臓器、個別医療、バイオプリンティング、デザイナーベビー。人間とは何か。

2025年(わずか8年後)までに起こること。(ダボス会議参加者の情報通信テクノロジー分野の役員・専門家への調査)。

- ・ 10%の人々がインターネットに接続された服を着ている。91.2%
- ・ 90%の人々が容量無制限の無料ストレージ(広告付き)を保有している。
- ・ 1兆個のセンサーがインターネットに接続される。
- ・ アメリカで最初のロボット薬剤師が登場する。
- ・ 眼鏡の10%がインターネットに接続されている。

- ・ 80%の人々がインターネット上にデジタルプレゼンスを持っている。
- ・ 3Dプリンタによる自動車第1号の生産
- ・ 政府が初めて国政調査の代わりにビッグデータの情報源を活用する。
- ・ 体内埋め込み式携帯電話の販売開始。
- ・ 消費財の5%が3Dプリンタで生産されたものになる。
- ・ 人口の90%がスマホを使用。80.7%
- ・ 人口の90%がインターネットに常時アクセス。
- ・ アメリカの道路上の10%が自動運転車になる。
- ・ 3Dプリンタ製の肝臓の初移植。
- ・ 法人の会計監査の30%をAIが実施。
- ・ 政府がブロックチェーンを介して初めて税金を徴収。73.1%
- ・ インターネットトラフィックの50%超が家電製品とデザイン用。
- ・ 自家用車ではなくカーシェアリングによる移動や旅行が世界的に増加。
- ・ 人口5万人を超える都市で初めて信号機が廃止される。63.7%
- ・ 世界GDPの10%がブロックチェーンテクノロジーで保管される。57.9%
- ・ 企業の取締役役にAIマシンが初登場。45.2%。労働市場への悪影響:労働代替的なイノベーションの波が発生。
- ・ 機械的の反復と精緻な手作業を伴う労働の死。弁護士、金融アナリスト、医師、記者、会計士、保険業者、図書館司書、などは部分的・完全に自動化。新産業で生み出される仕事は少ない。労働市場は二極化する。高収入の認知的・創造的職業は増加。定収入の単純労働も増加。中収入の機械的・反復的職業は大幅に減少。
- ・ 2020年には複雑な問題解決や社会的スキル、システムスキルの需要が高まる。雇用確保は悪化。男女不平等の悪化。
- ・ 自動化されるリスクが最も低い職業:精神科・薬物乱用ソーシャルワーカー、振り付け師、医者(内科・外科)、心理学者、人事担当マネジャー、コンピュータシステムアナリスト、人類学者・考古学者、船舶機関士・造船技師、セールスマネジャー、最高経営責任者。

以上が、この本のポイントだ。

近未来に起こると予想されたことは日本にはほとんど起こるだろう。

中間層の没落は不可避である。

人間の肉体と精神に関する高い知見を持つ人が行う仕事、人間が織りなす組織や社会に対応するスキルを有する人が行う仕事、等が生き残るということだろうか。近未来の職業人とは「人間通」の職業人である。

坂村健 「IoT とは何かー技術革新から社会革新へ」 (角川新書)

30年ほど前からトロンの開発者として有名な著者だが、トロンの思想は実は現今のキーワード「IoT」そのものだった。「組み込みシステム開発環境」TRON は「IoT」のコンセプトを世界で最初に提示したのだ。「IoT」という言葉はよく聞かすが、この本では具体的なプロジェクトに沿って実践者として説明してくれているのが貴重だ。

TRON では組み込み用標準 OS を確立し、普及させるために技術仕様もライセンスも無償で公開する「オープンアーキテクチャ」とした。

ドイツのインダストリアル 4.0 は製造業を対象としているが、日本の TRON は対象を限定していない。すべてを自動連携させようとしている日本の方がすすんでいる。ポイントは日本の進んだ技術をオープンにした「オープンな IoT」にできるかにかかっている。あらゆる製品に個体識別 ID を組み込み、クラウドとつなぎ、スマホを使って読めるようにする。IoT (Things)ではなく IoE(Everything)だ。

トレーサビリティとメンテナンス: 血液製剤などの医薬品。食品。家庭薬。冷蔵庫(製品期限)。ワクチンやワインには温度センサー(管理)。トレーサビリティ。そばアレルギー(食品の成分)。事故時(問題の所在)。廃棄物(分別・リサイクル)。住宅用火災警報器(故障・予防)。保証・メンテナンス。健康管理。旅客機の整備(部品メンテ)。街灯や遊具(点検)。インフラ管理。電力(予兆)。水道(漏水)。

社会基盤の老朽化、エネルギー危機、災害、医療、高齢化社会、などの国家的課題を IoT で解決しよう。

ucode で空間を場所として構造化。場所同士の関係性。マンナビ。電子結界。IOT 国土。建築単位。エレベータ(移動予測・運転効率)。プログラマブル建築。インダストリアル 4.0(蒸気・電機・電子の次)。サービス 4.0(電話・通信・デジタルの次)。特定のお客様。都市交通は IC カードを IoT 化。最短経路案内。身体属性に応じた経路案内。免税手続き。チェックイン簡素化。服の採寸。レストラン検索。海外旅行者への災害時支援。カスタマーがベンダーを管理。GoV2.0 オープンデータで行政イノベーション・情報公開。リアルタイム運行データ、乗客データ、)。API(アプリをかける)によるデータ公開(アプリの登場により開発コストはゼロ)。環境誠意は行政・活躍は民間。スマートハウス。カメラ(ピン)。こたつとエアコン連携。遊園地のアルバム。自動車は未来のカメラ。

プログラミング教育競争。プログラミングできる農民。イスラエル。エストニア。コンピュータサイエンス。ドッグイヤー(7倍)からマウスイヤー(18倍)。責任とコスト分担さえ解決できれば。自動車は道路センサー。日本のギャランティ志向が足かせ。オープン化。新宿の街灯。ガバナンスの問題。データは誰のものか。スマートグリッド(需要と供給の調整)。制度改革。プライバシーとパブリックのバランス哲学。事業者の義務としてのプライバシー。情報利用裁判所。技術だけではなく出口戦略。何が適切か。

ucode でモノ、空間、相互関係が統一的に扱える。ビッグデータ。リアルタイム。蛇口。

ローカルとクラウドの総体を高度化。

東京の公共交通:鉄道 14 社局、バス 38 社局、タクシー1100 社。経済成長のカギはイノベーションしかない。文系と理系の協力による大改革を。

幸田露伴「努力論」(岩波文庫)

文豪・幸田露伴の厚みのある人生論。努力論というより日本を代表する幸福論だ。

運命。人力。自己革新。努力。修学。資質。四季。疾病。気。

こういうキーワードで事細かく生き方を論じた名著であり、首肯するところが多い。

最も読むべきは「幸福三説」である。惜福。分福。植福、これを三福という。

惜福とは、福を使い尽くし取り尽くしてしまわぬをいう。個人では家康の工夫。団体では水産業、山林、軍事。

分福とは、自己と同様の幸福を分かち与えることをいう。人の上となり衆を率いる人が分福の工夫をしなければ、大なる福を招くことはできない。分福は秀吉が優れていた。

清盛。ナポレオン。尊氏。福は惜しまざるべからず、福は分かたざるべからず。

植福とは、人世の慶福を増進長育する行為である。自己の福を植え、同時に社会の福を植えることだ。

「福を惜しむ人はけだし福を保つを得ん、能く福を分かち人はけだし福を致すを得ん、福を植うる人に至っては即ち福を造るのである。植福なる哉、植福なる哉」

・志を立てる。先ず高からんことを欲するのが必要で、さて志し立って後はその固からんことを必要とする。

・凡庸の人でも最狭の範囲に最高の処を求むるならば、その人はけだし比較的に成功しやすい。

・天地は広大、古今は悠久。内からみると、人の心は一切を容れて余りあるから人ほど大なるものはない。外からみると、大海の一滴、大空の一塵、、、。

・春生じ、夏長じ、秋に自ずから後に伝わる子を遺し、冬自ずから生活の閉止を現す、、

・世間の一切の相は、無定をその本相とし、有変をその本相として居る。変の中にも不変あり、無定の中にも定がある。

・願わくば張る気を保って日を送り事に従いたいものである。致大致正致公致明の道と我とを一致させるのが、即ち浩然の気を養う所以である。

渡部昇一「名著で読む 日本史」(扶桑社)

歴史の専門家は 30 年から 50 年の間に関する知見は深い、「通史」を書ける人はなかなかいない。専門家と素人の中間の人間として日本史を描こうとした著者の最晩年

の著作である。

日本とは何か、日本人とは何か、こういう問いを抱える身には参考になった。

古代では、「古事記」「日本書紀」「栄華物語」「平家物語」。

中世では、「神皇正統記」(北畠親房)「太平記」「名将言行録」(岡谷繁実)「日本中世史」(原勝郎)。

近世では、「中朝事実」(山鹿素行)「大日本史」(徳川光圀)「日本外史」(頼山陽)。

近現代では、「軍閥興亡史」(伊藤正徳)「近世日本国民史」(徳富蘇峰)「日本文化史」(辻善之助)「紫禁城の黄昏」(R・F・ジョンストン)「東条英機宣誓供述書」。

- ・ 「古事記」:国譲り。腕比べで負けた大国主命の息子は諏訪大社の神様(信玄が信仰)。勝った天孫族は鹿島神宮の祭神になった(中臣氏の神)
- ・ 「日本書紀」ができた頃の日本人は、自分の国を「中国」と言っていた。一番大切な国のことだ。シナでは中国というときはインドを意味していた。山鹿素行の「中朝事実」の中朝とは日本の朝廷をさす。
- ・ 「栄華物語」の著者・赤染衛門は世界初の女性歴史家。道長の栄華が中心。和文で書かれた初の国史。
- ・ 「平家物語」:叙事詩。「太平記」は北朝側に立った歴史。倒幕の書。
- ・ 「神皇正統記」は南朝側に立った歴史書。
- ・ 「太平記」:中世の日本。鎌倉、北条幕府、建武、南北朝。
- ・ 「名将言行録」:応仁の乱の前後で日本史は変わった。戦国時代から江戸時代までの名将の肉声が伝わる。一級史料。
- ・ 「日本中世史」は、平安時代から鎌倉時代への歴史の推移を明らかにした。
- ・ 「中朝事実」は朱子学を批判し、孔子に帰れと主張。古学の開祖。乃木大将が昭和天皇に献上した本。
- ・ 「大日本史」:紀伝 73 巻、列伝 170 巻、志・表 154 巻、全 397 巻。目録 5 巻を合わせて 402 巻。水戸藩は編纂に収入の三分の一以上をかけた。1657 年から 1906 年の 250 年間。彰考館(往時をあきらかにして来時を考察する)。
- ・ 「日本外史」は、皇室が幕府の上に位置していることを明らかにした。
- ・ 「軍閥興亡史」は、日露戦争から第二次大戦で負けたところまで書いている。明治、大正、昭和をつなぐ軍事を中心とした歴史書。
- ・ 「近世日本国民史」は、信長から西郷・大久保の死まで 100 巻。「明治という偉大な時代を書きたい」と思った蘇峰は漢文、筆文字、和本、英語をよめた人物。朝鮮征伐は詳しい。明治を全ては書けなかった。徳川か時代から西南戦争。「吼え狂う 波の八重路を 乗り越えて 心静けく 港にぞ入る」(蘇峰の辞世)
- ・ 「日本文化史」は、日本文化の核心を追った個人が書いた通史。
- ・ 「紫禁城の黄昏」。「シナには近代欧米的な意味での国家は、かつて存在したことがなく、いろいろな王朝があっただけである」。

・ 「東城英機宣誓供述書」:日本帝国崩壊史の最重要文献。
さて、どれから読むか。

2017年5月

マルチロ・マッスミーニ:ジュリオ・トノーニ 『意識はいつ生まれるのかー脳の謎に挑む統合情報理論』 (亜紀書房)

脳は意識を生み出すが、コンピュータは意識を生み出さない。両者の違いは何かを探り、「統合情報理論」に至るプロセスを丹念に追った2013年の本の翻訳作品。

基本命題:あるシステムは、情報を統合する能力があれば、意識がある。

公理1:意識は無数の他の可能性を排除した上で成り立っている。

公理2:意識は統合されたものである。

公理3:意識を生み出す基盤は無数の異なる状態を区別できる統合された存在である。ある身体システムが情報を統合できるなら、意識がある。

個別のシステム(視覚系、聴覚系、触覚系、。。システムの中に下位の形や色を見分ける部位がある))がばらばらに存在しているなか統合されていないから意識はない。それぞれが専門化されながら、完全に統合されているなら意識はある。身体で意識があるのは、視床一皮質系のみだ。

刺激を受けた感覚が完全に意識にのぼる「には、0.3-0.5秒かかる。情報が高いレベルで統合されるには時間がかかることを意味している。

一(いち)なる組織には、各要素間に因果関係がある。情報を統合できるシステムのあるところに意識あり。

この本を読んで、「脳と意識」をめぐる最初の疑問は晴れたが、二つの疑問が残った。

1:この本でいう意識は、心とどういう関係にあるか?

2:組織のような非身体システムでも、統合されていれば意識があるということか?

丸山真男 「日本の思想」 (岩波新書)

前々から関心を持っており、取り組まなければならないと考えていた「日本思想史の包括的な研究」が貧弱であることがよくわかった。これはやはり難しい問題だったのだ。

丸山は世界の思想の重要な思想的産物は、ほとんど日本思想史のなかにすでにあるという。『日本の思想』では、「全体」「構造化」「立体的」「配置」「試図」、。。というキーワードがでてくる。

「まえがき」から。

・時代の知性的構造や世界観の発展あるいは史的関連を辿るような研究は甚だ貧し

い。

- ・日本史を通じて思想の全体構造としての発展をとらえようとする、誰でも容易に手がつかない
- ・まるごとの社会的複合形態でなくして一個の思想として抽出してその内部構造を立体的に解明すること自体なかなか難しいが、たとえそれができても、さてそれが同時代の他の諸観念とどんな構造をもち、それが次の時代にどう内的に変容して行くかという問題になると、ますますはっきりしなくなる。
- ・自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当る思想的伝統はわが国には形成されなかった
- ・問題はそれら(あるゆる思想の断片)がみな雑然と同居し、相互の論理的な関係と占めるべき位置とが一向判然としていないところにある。
- ・あらゆる哲学・宗教・学問を「無限に抱擁」してこれを精神的経歴のなかに「平和共存」させる思想的「寛容」の伝統

「あとがき」から。

- ・「外来思想」の移植と「伝統」思想の対応形態といったものを全体として問題にし、そのなかで個々の思想を位置づけることなしに、、、
- ・およそ千年をへだてる昔から現代にいたるまで世界の重要な思想的産物は、ほとんど日本思想史のなかにストックとしてあるという事実、、、
- ・私自身としてはこうして現在からして日本の思想的過去の構造化を試みた、、、
- ・「日本の思想」は、、、思想史的な構造をできるだけ全体的にとらえて、、、それらの問題の「伝統的」な配置関係を示そうという文字通りの試図にすぎない。

司馬遼太郎「街道をゆく モンゴル紀行」(朝日文庫)

1974年発刊の本だから40年以上前のモンゴル。建国が1924年であり、世界で2番目の社会主義国だった。司馬節を楽しんだ。

ハバロフスク、イルクーツク経由で、モンゴル人民共和国の首都・ウランバートル、そしてゴビ砂漠への旅行記。

- ・匈奴は、モンゴル族とチベット族の総称。
- ・モンゴル人は野菜を食べない
- ・モンゴル人は性格がおおらかで素朴。他民族(漢民族以外)を憎悪することが少ない。
- ・遊牧民族は民族的自尊心が強い。
- ・日本人の先祖という意識がある。

- ・モンゴルの詩人の詩がいい。
- ・日本人より5センチほど身長が高い。
- ・「元朝秘史」
- ・ソ連は日本人捕虜をモンゴルに配給。13847人。2年間の抑留中、1割強の1684人が死んだ。国立オペラ劇場は日本人捕虜の労役でつくられた。

安岡正篤「禅と陽明学」(プレジデント社)

陽明学に至る道筋を禅からたどり、陽明学を解説した書だ。東洋哲学は脳科学で証明されてきつつある。ダライ・ラマの仏教の解説も宇宙科学から説明して納得した覚えがある。最先端科学で哲学や宗教を説明する時代になった。

以下、自分なりに要点をまとめてみる。

人間の意識の深層は永遠につながっているから、真剣に学問求道をやれば主観を通じて大いなる客観に到達する。それが主客合一だ。良知を究める、それが致良知だ。達磨から始まった禅宗では南都北漸というようになる。南派は直ちに悟る頓悟を旨とし、北派は修養を積んで悟る漸修を旨とする。五家七宗があり、そのうち臨済と曹洞が日本に伝わった。臨済宗は棒で殴り、怒鳴りつける喝を行う。曹洞宗は綿密である。

儒教・仏教・道教がしだいに総合されて易学が誕生し、宋の時代には新たな人生と社会の指導原理になった。太極から陰と陽が生まれる。この考えでは生まれた日が一番大事という運命学になる。それが統計学でもある四柱推命である。

禅は道を体得させる。実践を大事にする。自分の体で実践し考えさせる。そして主客一如になる。禅の奥義が華嚴。何妙法蓮華経とは自分自身を蓮華のように清く尊いものにし、世界を美しい蓮華のような理想世界にすること。

スラブ人は虚無的で何者も信じない。中国人は人間を信じる。漢民族は生命力が偉大であり、最後まで残るだろう。日本人は偉大なものを信じる。その日本人の民族性が禅や陽明学に意義と魅力を感じる。

王陽明(1472-1528)。快活。良知・致良知とは大脳皮質の論理的思索から始まり生命・意識の偉大なる深層に徹することだ。知行合一とは、知と行が限りなく循環して発達していくもの。心身一如。

(蒙古ほど面白いものはない。50歳のジンギスカンと26歳の耶律楚材の出会い。楚材は30年間宰相だった。忘年の交わり、か)

井上靖「蒼き狼」(文藝春秋)

鉄木真(テムジン)が成吉思汗(ジンギスカン)になっていく物語。

父が判然としないまま生まれたモンゴルの子は首を刎ねた敵のメリキトの首領の名前の鉄木真(テムジン)と名付けられた。同様に鉄木真の長男は父が判然としないまま生まれ、客人という意味のジュチと名付けられた。

モンゴル族は蒼き狼となま白牝鹿から生まれた最初のバタチカンが祖先である。この二人は出生の謎があるため、「狼になろう」と生涯を戦い続けた。敵を持たない狼は狼ではなくなる。その物語である。

1189年鉄木真は28歳でモンゴル部族の長である汗に推される。44歳、全蒙古の王となり盛大なる大君という意味の成吉思汗(ジンギスカン)となる。大きい耳、鋭い眼、引き締まった口許。

乱れのない統制。重層的な組織。厳しい訓練。鉄の規律。若き耶律楚材を登用する人材眼。「草原の如く拡がれ。海の如く布陣せよ。そして鑿(のみ)の如く闘え」という戦法。それが連戦連勝で空前の大帝国を築いた成吉思汗のやり方だった。戦いに明け暮れ中で勇壮な武将たちが育った。後継者候補の息子たちはそれぞれ逞しく育っている。また孫になるフビライとフラグも傑出していた。

成吉思汗はただ生きていくだけでなく、楽しく生きることをモンゴルに与えようとした。それが現実になってみると、モンゴルではなくなると強い違和感を覚えるのだった。

西夏・チャガタイ汗国・オゴタイ汗国・イール汗国・キプチャク汗国をつくり、インドと中国・宋をのぞく世界を征服した成吉思汗は、モンゴルの蒼き狼の末裔であることをまだ立証できていないと考える。大作戦を戦い続ける原動力はそれであった。出生の秘密を乗り越えるための人生であった。享年65。

成吉思汗の孫の第5代のフビライが1271年に建国した統一王朝・元は1271年から1368年まで100年保たずに滅び、朱元璋の明が引き継ぐ。

2017年6月

土井英司『エグゼクティブ・ダイエット』(マガジンハウス)

土井さんには一度、取材をしたことがあり、その後もパーティで顔を合わしている。

土井英司さんは、一日一冊のビジネス本を紹介するメルマガ「ビジネスブックマラソン」を12年数ヶ月=4500日以上続けていて、今、読者は6万人を超えている。続けるのは意志の問題ではなく続ける技術を知らなかったからだ、という説には毎日ブログを書き続けている私も賛成だ。

体重を76キロから62キロに落として快調に仕事を続ける40代初めの仕事師・土井英司が放ったダイエット本には何が書かれているか。

- ・鏡に身体を映して体型をチェックせよ
- ・一日 2 食・筋トレ 5 分を実行せよ
- ・野菜から食べて、それから魚や肉を食べよ
- ・スクワット 60 回、腹筋 10 回、腕立て伏せ 20 回から始めよ
- ・朝は水を摂り前日のものの排出に専念せよ
- ・ランチはコンビニでサラダ 3 つを買え(チョップドサラダ・サラダボウル)

以上を参考にしよう。

「時間と健康」に対する意識(コンシャス)がビジネスの、というより良き人生を送るための貴重な資源だ。それは健康寿命を延ばすことになり、日本社会の課題に貢献するだろう。「遊び」が人間の仕事になる時代を迎えようとしている今、2045 年のシンギュラリティに向けて、改めて身体に着目したい。

著者本人の「使用前」と「使用后」の比較写真が載っていないのは、画竜点睛を欠く気がするが、どうだろう。

浅川保「偉大な言論人 石橋湛山」(山日ライブラリー)

著者は甲府一高の教諭時代(41 歳あたり)に百周年記念館資料室で「校友会雑誌」に寄稿した湛山の文章を次々と発見する。以後、湛山にとりつかれ、全集を読み、ゆかりの場所を訪ねている。そして退職後に湛山顕彰のイベントを重ねながら、2007 年に「山梨平和ミュージアムー石橋湛山記念館」の開設にたどり着く。現在は理事長として活動している。石橋湛山をライフワークとした人生である。

石橋湛山は 1956 年 12 月に首相となったが、病を得てわずか 2 ヶ月で辞任した。出処進退の潔さで感銘を与えたが、あまりにも早い退陣を惜しまれた。

- ・山梨一中校長・大島正健は札幌農学校第一回卒業生で 13 年 5 ヶ月にわたり校長を務めた。薫陶を受けたのはわずか 1 年だが、大きな影響を受けた。湛山はこの甲府中学へは 2 年早く入学できたが、2 年落第している。
- ・湛山は中学時代から校友会雑誌などで活発に文章を発表している。甲府から石和、勝沼、笹子などへの旅行記は若さゆえの大胆さとユーモアに溢れている。
- ・成敗と是非とは判然別事に属せり、成敗は当時の形成によりて別れ、是非は後人の公説によりて定まる」(石田三成論)
- ・卒業時、53 名中 17 番。一高受験失敗、翌年も失敗し、早稲田へ。
- ・山中湖に別荘。父の供養は 17 回忌。日蓮宗権大僧正。書がいい。
- ・明治神宮の建設ではなく、日本と世界の人心の奥底に明治神宮を打ち建てよ。明治賞金(ノーベル賞のような)を設定せよ。
- ・帝国主義の大日本主義を批判し、平和主義である小日本主義を主張。「一切を棄つ

の覚悟」では、「我が国の総ての禍根は、小欲に囚われていること、志の小さいことだ」と断じた。満州や朝鮮の領有が経済にも人口問題に解決にも役にたっていないことを指摘し、「満州を棄てる、山東を棄てる、その他志那が我が国から受けつつありと考える一切の圧迫を棄てる」「世界の弱小国は我が国に向かって信頼の頭を下ぐるであろう」「従来の守勢から一転して攻勢に出でしむるの道である。」「兵營の代わりに学校、軍艦の代わり工場を。」「帝国議会の会期3ヶ月を改めて常設」を主張。

・教育論「実業教育」「官学と私学」「私学経営の新工夫」「志を大切にせよ」「クラーク博士の教育」

・現代の人心は何故に浅薄弱小なのか。自己の立場についての徹底した智見が欠けているからだ。

・兆民と福澤を評価。福澤の「縁の下の力持」は処世の教科書として尊崇している。

・62歳、吉田内閣大蔵大臣。63歳、公職追放。68歳、立正大学学長(16年間、84歳まで)、70歳、鳩山内閣通産大臣。72歳、総理大臣。88歳、「石橋湛山全集」15巻完結。死去。

安岡正篤「易と人生哲学」(致知出版社)

・易学とは「動いてやまない大自然創造の理法に従って自分の存在、生活、仕事を自覚し創りあげていく道を明らかにした立命の学問である。

・易とは人間、人生、生命などに関する維新を研究する学問である。変化し、停滞しない、これが維新である。

・易とは人間世界の偉大な統計的研究

・易とは運命を宿命にすることなく、立命にもっていくこと。

・四柱推命は、年・月・日・時という四柱を並べて運命を研究する。生日が重要。

・易は宿命を探求するのではなく、運命を創開(化成)していく。

・運命の中に宿命と立命がある。自分で自分の運命を創造していく立命が本筋。

・数(すう)は、生命の中にある神秘的な因果関係をいう。

・「木」を認識、次に「火」を発見、木と火の存立は「土」が行う。土の中に「金」がある。土から「水」が出て、木を養う。木から火を出し、火は土になり、土は金を産み、金は水を流す。これが発達して十干、十二支となる。

・宿命は立命に向かう。

・両親は二人。十代遡ると百万を超え、三十代遡ると十億を超える。

・運命とは、われらいかにあり、いかになすべきかという義命の学である。

・八観(人間観察法):通づれば其の礼するところを観る(礼拝。尊重するとおろ)。貴ければ其の進む所を観る(何を進めるか)。富めば其の養う所を観る。聴けば其の行う所を観る。止れば其の好む所を観る。習えば其のいう所を観る(何を言い出すか)。窮

すれば其の受けざる所を觀る(どういった援助を受けないか)。賤しければ其の為さざる所を觀る(何をしないか)。

・六檢(人間検査法):之を喜ばしめて其の守を驗す(原理原則を守るか)。之を楽しまして以て其の癖を驗す(かたよる所を觀る)。之を怒らしめて以て其の節を驗す(しまりかたをみる)。之を懼れるしめて以て其の特を驗す(自立性)。之を哀しましめて以て其の人を驗す。之を苦しめて以て其の志を驗す。

・易学は、人間学、人物学である。

・天地自然と人間世界の相関関係の英知を尽くしてまとめあげた中国古代の思想の精髓が「易経」。

司馬遼太郎「草原の記」(新潮文庫)

モンゴルの一人の女性を通して描く、一点の無駄も緩みもない感動の叙事詩。

「天は蒼蒼、野は茫茫、風吹き、草低く、牛羊を見る」

オゴタイ。

チンギスハンの後継者(第3子)。43歳で即位。ホラズム王国を亡ぼし、中国金王朝を攻め潰し、ロシアへば新たな征服事業を開始した。

海のように人柄が大きく、山のように聡明と言われた。

「財宝がなにであろう。金銭がなんであるか。この世にあるものはすべて過ぎゆく」(この世はすべて空(くう)だ)

「永遠なるものとはなにか、それは人間の記憶である」(自分がどんな人間だったかを後世に記憶させたい)

「人間はよく生き、よく死なねばならぬ。それだけが肝要で、他は何の価値もない」(死後の評判こそ大切)

ツェベクマという女性。(解説の山崎正和は、この世には歴史をものともせず生きるという、生き方もあるのかも知れない、と語っている)

モンゴル人の歴史がこの女性の人生にある。

1973年、司馬遼太郎は40代の彼女にウランバートルを案内してもらった。17年後の990年に再会。その交流の中でモンゴル人の歴史と人生を知る。司馬遼太郎は大阪外語学校蒙古語科卒。

ツェベクマさん(女性)大正13年生まれ。(司馬遼太郎は大正12年。私の父も大正12年)

- ・大正13年、ロシア領シベリアのバイカル湖の近くのブリヤート・モンゴルに生まれた。
- ・幼時にロシア革命の余波を経験
- ・昭和2年、3歳で両親に連れられて「満州」のホロンバイル草原に逃れる。昭和6年、

7 歳で満州事変の砲声を遠くで聞く。ハイラル南郊の南屯の高塚シゲ子先生宅に起居。

- ・「満州国」の西辺に住み続ける
- ・中国共産党の世で青春を過ごす。東京高等師範学校卒の人と結婚し一児をもうける。黒竜江省の軍事政治大学で学び、内蒙古自治区で小学校の先生になる。夫は師範大学、内蒙古大学の教授になる。
- ・毛沢東のプロレタリア文化大革命で、少数民族として辛い目に遭う。夫が拉致される。
- ・内モンゴルから脱走し幼女と無許可でモンゴル人民共和国に入り 10 年間無国籍になる。ウランバートルホテルで働き 20 余年勤務。10 年後に国籍を取得。娘はレニングラード大学の電子工学科に留学。
- ・定年。夫と 26 年ぶりに再会、直後に夫は亡くなる。草原でゲルを結び牛二頭を飼って暮らす。「私の(人生)は、希望だけの人生です」

2017 年 7 月

村井重俊「街道についてゆく――司馬遼太郎番の六年間」(朝日文庫)

『街道をゆく』は 1971 年から週刊朝日で連載がはじまり、亡くなる 1996 年までほとんど休みなく続いた。47 才から 25 年間、毎週 16 枚の連載で、文庫本は 43 冊になった。「街道はなるほど空間的存在ではあるが、しかしひるがえって考えてみれば、それは決定的に時間的存在であって、私の乗っている車は、過去というぼう大な時間の世界へ旅立っているのである」

この本の編集者は 25 年間で 5 人、著者の村井は最後の担当者だった。

この本では国民作家・司馬遼太郎の人間味が描かれている。そこに焦点をあててみたい。村井による司馬遼太郎観察である。

- ・司馬さんは意外にわがままなのだ。
- ・司馬さんの原稿は万年筆で書かれるが、赤や青、緑色のマジック、ボールペン、色えん筆などで推敲を重ねる。
- ・司馬さんのはなしはいつもわかりやすかった。リアリティがあり、ユーモラスで、聞いていると心が広がるような、明るさがあった。
- ・司馬さんは土木が好きなのだった。
- ・必ずなるよ。「日本は本当にだめになるんでしょうか」
- ・司馬さんは意外に料理ができた。
- ・68 才の司馬さんは、書生としての基本姿勢を大切にしていた。

- ・夫妻は毎日、散歩する習慣がある。
- ・遺跡をたずね、遺物をスケッチし、写真を撮り、野村さんの話を小さなノートにまとめていく。
- ・カニアレルギー
- ・大きな旅の場合、司馬さんは事前にノートをつくる、、、「資料を集めたり、調べるぐらいおもしろいことはない。(KOKUYO の Campus)
- ・「七度になると寝込み、八度以上になれば、ちょっと照れくさいが――遺言を考える」
- ・偏食の司馬夫妻(カニ、鶏は食べない)
- ・「雅子さん、日記をつければいいと思うな。貴重な資料になりますよ」(皇太子妃)
- ・この辺りの粘りが、司馬さん独特のものでもあった。ただの世間話が『街道をゆく』の一章にまでなっていく。
- ・「高校三年生」もそうだし、「朧月夜」も知らないようだったのには驚きましたね」(安野光雅)
- ・「ひょっとしたら性癖かもしれない、、、ここは元はなんだろうということが気になってしまう」
- ・「大坂外語に行っているときは、外務省の下級の役人になって、どこか辺境の領事館に勤めたいと思っていたね。そして三十になったら小説を書きましよう」と
- ・司馬さんは相撲ファンではあった。ひいきは断然、旭富士だった。
- ・旧弘前高校を受験し失敗している。「自分の聖蹟だと、弘前と高知が狙い目だと思ったんだな。高知はなんとなく野蛮そうなので、弘前にしました」
- ・相当の負けず嫌いなのだ・
- ・司馬さんは宮崎アニメの大ファンだった。・
- ・アレルギー性鼻炎に加え、座骨神経痛にも苦しんでいた。
- ・「戦後の日本の繁栄は終わったと思った方がいい。これからは大国などとはいわず、世界の片隅で日本という国がひっそりと暮らせていけばいいんです」「あとはよき停滞、美しき停滞をできるかどうか。これを民族の能力をかけてやらなければ生けないんです」「ちゃんとした人間が上に立てば、なんとかなるんです」「日本は再び敗戦を迎えた」
- ・旅に出る前、いつも司馬さんは背筋をのばした。「さあ、行きましょうか」

宇野千代「生きていく私」(角川文庫)

自由奔放に99年の人生を生きた宇野千代の自伝。85才の時の執筆だ。
4回の結婚、13回の自宅建築、、、。人生を肯定した楽天的生き方に感銘を受ける。

以下、人生観と仕事観。

- ・(失恋)いつのときでも、抗うことなく、自分の方から身を引いた。
 - ・泥棒と人殺しのほかは何でもした。
 - ・小説は誰にでも書ける。それは、毎日毎日坐ることである。
 - ・私はいつでも、自分にとって愉しくないことがあると、大急ぎで、そのことを忘れるようにした。思い出さないようにした。そして全く忘れるようになった。これが私の人生観、、、
 - ・私の書くものは、ほんの僅かしかない。とことんまで手を入れるのが癖であるから、それほど、可厭になるものは書いていない。
 - ・私は、どんなときでも、どんなことでも、それが辛い、苦しいこととは思わず、楽しい、面白い、と思うことの出来る習慣があった。
 - ・私は、辛いと思うことがあると、その辛いと思うことの中に、体ごと飛び込んで行く。
 - ・何ごとかに感動すると、すぐに行動しないではおられないのが、私の性癖であった。
 - ・何事かをし始めると、狂気のようになるのが、私の性癖であった。
 - ・何でも面白がるのが、私の癖であった。
 - ・私は 12、3 年前から、足を丈夫にするために、毎日、1 万歩歩くことを始めた。
 - ・一かけらの幸福を自分の体のぐるりに張りめぐらして、私は生きていく。幸福のかけらは、幾つでもある。ただ、それを見つけ出すことが上手な人と、下手な人とがある。幸福とは、人が生きて行く力のもとになることだ、と私は思っている。
 - ・幸福は伝染して、次の幸福を生む。
 - ・人間同士のつき合いは、この心の伝染、心の反射が全部である、、、幸福は幸福を呼ぶ。
 - ・小説を書くこと、きもののデザインをすること、、、どちらの仕事の内容も、それまでには全くなかったものを、新しく発見し、切り開いて行くと言うことでは、少しの違いもない。
 - ・若さの秘訣というものがあるのかどうか、、好奇心が旺盛である、、、素早い行動、、、。男たちへの憧憬、、、
 - ・「人の世はあざなえる縄の如し」と昔の人も言ったが、誰の手が、その縄をあざなうのか、知ることも出来ないのである。
 - ・私には年齢と言う意識がなかった。
 - ・自分の幸福も、人の幸福も同じように念願することの出来る境地にまで、歩いて行くのである。その境地のあるところまで、探し当てて歩いて行く道筋こそ、真の人間の生きて行く道標ではないか、、、
- 交流があり 66 才で逝った平林たい子は、「私は生きる」と言ったのだが、99 才という長寿の宇野千代は「生きていく私」と言う。宇野千代の 66 才の時から 84 才までは、214 ページから 373 ページまでだ。人生のページというものがあるとしたら、213 ページの平林たい子と、373 ページに加え、さらに 15 年分は 132 ページであり、宇野千代の人生

は 505 ページという盛大なものになるという計算になる。実に平林たい子の 2.4 倍の人生を生きることになるのだ。まさに「生きていく私」というタイトルそのままである。

「角川文庫版に寄せて」(平成 8 年新春)には、この正月で数えの百才になったとあり、あと 4 年ほど生きれば、、、明治、大正、昭和、平成と生きてきて、その上さらに 21 世紀が見たいとは我ながらなんとも呆れたものではないか」と書いている。宇野千代はこの年 1996 年(平成 8 年)に天寿を全うしている。最後まで元気だったということになる。

アインシュタイン・フロイト『人はなぜ戦争をするのか』(講談社学術文庫)

1932 年の二人のユダヤ人の天才二人の書簡と解説。物理学のアインシュタイン 53 才、心理学のフロイト 76 才。そして解説は養老孟司と斉藤環。

1932 年 7 月 30 日。ポツダム。アインシュタイン。

「人間を戦争というくびきから解き放つこちはできるのか？」

・なぜ少数の人たちがおびたしい数の国民を動かし、彼らを自分たちの欲望の道具にすることができるのか？

・国民の多くが学校やマスコミの手で煽り立てられ、自分の身を犠牲にしりくーこのようなことがどうして起こり得るのだろうか？

・人間の心を特定の方向に導き、憎悪と破壊という心の病に冒されないようにすることはできるのか？

1932 年 9 月。ウイーン。フロイト。

「法や権利に支えられた共同体を持続的なものにしなければならないのです。いくつもの組織を創設し、社会を有機的なものにします。、、、この人間集団を一つにつなぎとめるのは、メンバーのあいだに生まれる感情の絆、一体感なのです。」

・皆が一致協力して強大な中央主権的な権力を作り上げ、何かの利害対立が起きたときにはこの権力に裁定を委ねるべきなのです。、、、二つの条件が満たされていなければなりません。現実にはそのような機関が創設されること、、、自らの裁定を押し通すのに必要な力を持つこと、、、

・人間から攻撃的な性質を取り除くなど、できそうもない。、、戦争とは別のはけ口を見つけてやればよいのです。、、その(破壊活動)反対の欲動、つまりエロスを呼び覚ませばよいこととなります。、、二つの種類があります。、、一つは愛するものへの絆のようなものです。、、もう一つの感情の絆は、一体感や帰属意識によって生み出されません。

・優れた指導層をつくるための努力をこれまで以上に重ねていかねばならないのです。自分で考え、威嚇にもひるまず、真実を求めて格闘する人間、自立できない人間を導く人間、そうした人々を教育するために、多大な努力を払わねばなりません。

・私たち(平和主義者)はなぜ戦争に強い憤りを覚えるのか？、、心と体が反対せざる

を得ないからです。、、、心理学的な側面から眺めた場合、文化が生み出すもっとも顕著な現象は二つです。一つは知性を強めること。力が増した知性は欲動をコントロールしはじめます。二つ目は、攻撃本能を内に向けること。

・すべての人間が平和主義者になるまで、あとどれくらいの時間がかかるのでしょうか、、、文化の発展が生み出した心のあり方と、将来の戦争がもたらすとてつもない惨禍への不安――この二つのものが近い将来、戦争をなくす方向に人間を動かしていくと期待できるのではないのでしょうか。、、、文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩み出すことができる！

養老孟司

・個人でいえば意識と身体、集団でいえばアルゴリズム的な社会と自然発生的な社会、その両者のバランスの上に将来の社会システムが構築されていく。戦争の地位も、その中で定まるというのが私の予想である。、、、いずれ飼いや殺されるに違いない。

斉藤環

・現代におけるネットは、いわばエロスの回路として平和に貢献するところが大きいと私には思えるのです。

・嘆く必要はありません。私たちは世界史レベルで見ても最高度に文化的な平和憲法を戴いているからです。そこにはフロイトすら思いもよらなかった戦争解決の手段、すなわち「戦争放棄」の文言が燦然と輝いています。この美しい憲法において先取りされた文化レベルにゆっくりと追いついていくことが、これからも私たちの課題でありつづけるでしょう。

コリン・パウエル 「リーダーを目指す人の心得」 (飛鳥新社)

レーガン大統領はジョークの収集家だったが、パウエルは逸話の収集家であった。そのエピソードがパウエルにとっての人生やリーダーシップの教科書となった。その逸話の主人公たちのおかげでパウエルの人生が形づくられた。すべては人である、これが結論である。

パウエルは気に入った名言や格言のメモを机と透明マットカバーのあいだに挟んでいた。パウエルは名言の収集家でもあったのだ。

1937 年生まれ。黒人として初めて米国陸軍で四つ星大将に上りつめ、米国四軍(陸軍・海軍・海兵隊・空軍)のトップである統合参謀本部議長に最年少で就任。2001 年から 2005 年まで国務長官を務めた人物。その人の仕事論、人生論、リーダーシップ論。

- ・功績は皆で分けあい、非難は一人で背負う。
- ・問題解決こそリーダーがすることだ。

- ・内壁に当たったあと、さらに生長し、上にあがりたいと思えば、ピラミッドの外へ伸びるしか道はない。
- ・安定して優れた実績を残す者。勉強を続けて知的に成長する者。いずれ役に立つ知識・技能を得ようとする者。性格や倫理観。度胸。誠実無私。自信。同輩からの尊敬と信任。
- ・部下が求めるのは無私なリーダーであり、利己的なリーダーではない。
- ・部下をよく知り、尊敬する。一人ひとりについて学べるかぎりのことを学んだ。
- ・部下は自分の弱みを補完してくれる人を選ぶ。副官は厳しくて怖い人を探す。
- ・仕事の基準は高めに、ただし不可能ではないレベルに設定する。
- ・悪いニュースはすべて耳に入れておきたい。
- ・記者対応：: 答えたくない質問には答えなくてよい。仮定の質問には答えない。間をあけないこと、しゃべることを思いつかなければ、質問をくり返せばよい。
- ・部下は直属にする。補佐役は少ない方がいい。
- ・「抑えた示威ほど強く訴えるものはない」(トウキョディデス)
- ・大量破壊兵器がないとわかっていたら、戦争はしなかつたらう(イラク戦争の失敗)
- ・人生はフロントガラスの向こうを見ながら進むべきで、バックミラーを見てはいけ
ない。、学んで進むのだ。
- ・講演: 仕事の量をコントロールできる。講演自体が面白い。年次報告書を何年分も読
み、組織を詳しく研究し、最後は就職活動ができるレベルまで相手のことを調べる。頭
の中にスピーチを構成するユニットをたくさん持っている。
- ・「物事をなすのは組織ではない。物事をなすのは計画や制度ではない。物事をなす
のは、人だけだ。組織や計画、制度は、人を助けるかじゃまするか、である」(リーコー
バー大将)
- ・今の私があるのは、人生で出会った多くの人々のおかげなのだ。

成毛真「AI時代の人生戦略」(SB新書)

「STEAM」が最強の武器である。残酷な 5 年後に生き残るためあなたが身につけておくべきこと。堀江貴文・鈴木寛対談集録。

サイエンス(科学)。テクノロジー(技術)。エンジニアリング(工学)。アート(芸術)。マセ
マティックス(数学)。これらの頭文字を並べたものが「STEAM」だ。

- ・古典より現代アート。OKGo。CGと実写の接近、
- ・使う側: AIやロボットを道具にしてイノベーションを起こす。
- ・ロボアドバイザー(フィンテック): 投資ポートフォリオ。手数料 0.3%以下(丸投げのラ
ップ口座 2.0%)。

- ・論述指導、採点もAIに。TOEFLは自動採点。
- ・シンギュラリティ以降は「善と美」が人間の仕事して残る。
- ・サイエンス系のNHK番組:「サイエンスゼロ」(最新科学技術。30分)「コズミックフロント・NEXT」(宇宙最新知見)「モーガン・フリーマン 時空を超えて」。
- ・「ナショナルジオグラフィック日本版」「ニュートン」「iPad 日本語版ニュートン」「日経ものづくり」
- ・想像力と創造力
- ・イーロン・マスク「ペイパル」「テスラモーターズ」「スペースX」(火星移住計画)
- ・胃カメラは毎年飲まないダメ。ポケモン。VR(仮想現実)とAR(拡張現実)。自動車業界は完全崩壊。
- ・『楽観主義者の未来予測』『科学はどこまで進化しているか』『スーパーヒューマン誕生!』『AIの衝撃』『人間さまお断り』『図解よくわかるナノセルロース』『スマートマシン』『ゼロトゥワン』『限界費用ゼロ社会』

佐藤愛子「九十歳。何がめでたい」(小学館)

2017年5月の時点で日本の65歳以上の人口は3400万人、80歳以上の人口は1000万人を超えた。100歳以上は7万人である。異次元の高齢社会に突入したのである。これからは、90歳が普通になる時代だ。この本の読者はたぶん、高齢者だろう。今後は、先日105歳で亡くなった日野原重明先生や佐藤愛子のような超高齢者がスターになる時代を迎えることになるだろう。佐藤愛子が2015年に「女性セブン」に連載したエッセイの集合体がこの本である。当時は92歳。大正12年生まれだから今年中に94歳になるはずだ。

さて、佐藤愛子は昔、「身の上相談」と言っていた新聞の「人生相談」の愛読者である。時代とそこで生きる人の人生が垣間見えて、回答者の価値観、人生の軌跡がうかがわれて興味深いからという。この本の話題は、高齢者となった自身の経験と新聞の「人生相談」から見える世相への怒りが中心だ。長生きして、居直った、歯に衣着せぬ舌鋒が読者の共感を呼んでいる。

「ああ、長生きすることは、全く面倒くさいことだ。耳だけじゃない。眼も悪い。始終、涙が滲み出て目尻目頭のジクジクが止まらない。膝からは時々力が脱けてよろめく。脳みそも減ってきた。そのうち歯も抜けるだろう。なのに私はまだ生きている」

「本を読めば涙が出てメガネが曇る。テレビをつければよく聞こえない。庭を眺めると雑草が伸びていて、草取りをしなければと思っても、それをすると腰が痛くなってマッサージの名手に来てもらわなければならなくなるので、ただ眺めては仕方なくムツとしているのです。そうしてだんだん、気が滅入ってきて、ご飯を食べるのも面倒くさくなり、たまに娘や孫が顔を出してもしゃべる気がなくなり、ウツウツとして「老人性うつ病」という

のはこれだな、と思いながら、ムツと坐っているのです」

このような状況の中で、「女性セブン」での隔週連載が始まってみると、錆びていた脳細胞が働き始め、老人性うつ病から抜け出したのである。人間は「のんびりしよう」と考えてはダメだというのが佐藤愛子の悟りである。

以下、佐藤愛子語録。

・愛と恋は違う。愛は積み重ねて昇華して行くものだけれど、恋は燃え上がってやがては灰になってしまうものだ。

・もう「進歩」はこの辺でいい。更に文明を進歩させる必要はない。進歩が必要としたら、それが人間の精神力である。

・「一生意思を曲げない覚悟」ではなく、長い年月の間にやがて来るかもしれない失意の事態に対する「覚悟」である。

ミクロで見るとこの本が述べているのが異次元の高齢化の中身だが、マクロで見ると違った姿が見える。現在医療は 40 兆円、予防 10 兆円、介護 10 兆円で、計 60 兆円規模だ。2025 年(?)には、医療 60 兆円、予防 20 兆円、介護 20 兆円、計 100 兆円になるという予測だ。マクロでもミクロでも大変な時代になる。

2017 年 8 月

寺島実郎「ユニオンジャックの矢」(NHK出版)

寺島の 1975 年以來 40 年以上にわたる文献研究とフィールドワークによる英国の観察と考察の集大成。生きてきた時代を通じて構築した英国に関する「全体知」と本人が言うことに納得せざるを得ない重厚な書である。

・漱石の言葉「未来は如何にあるべきか。自ら得意になる勿れ、自ら捨てる勿れ、黙々として牛の如くせよ。孜々として鶏の如くせよ。内を虚にして大呼する勿れ。真面目に考えよ。誠実に語れ。しじつに行え。汝の現今に播く種はやがて汝の収むべき未来となって現はるべし」(フォーサイトの連載「1900 年への旅」で向き合った言葉)

・「蓄積した歴史的体験を生かし、、専門性を生かし、多様な人材を活用して課題解決に立ち向かう「全体知」がエンジニアリングの本質である。」

・「歴史の蓄積と相関の中で、世界を知る力を研ぎ澄ますこと、それが重要である」

内容については、読者自身が学ぶことにして、ここでは寺島実郎という知的巨人自身の新入社員から数年間の姿を追うことにしよう。

1975 年 7 月に寺島実郎は三物産社員として羽田空港からロンドンに到着し 4 ヶ月の出張をしている。会社とホテルと本屋を往復。夜はホテルで英国に関する本を読み込

む。休日は大英博物館、ヴィクトリア&アルバート博物館、自然史博物館を何度も訪問。帰国後、「英国に関する考察」をまとめ、それが社内の小冊子になる。それを読んだ「中央公論」の粕谷一希編集長からの注文で1976年5月号の「中央公論」に「英国病の症状とは？」と題した論考を書く。そして1980年に「中央公論」に「我ら戦後世代の坂の上の雲」を書く。

私は、1978年7月に日本航空の実習派遣員として成田からロンドンに到着し1年2ヶ月を過ごした。英国内外の旅行、観劇、シェークスピアと英国経済の研究、ロンドン大学夜間に通うなど貯金せずに寝る間を惜しんで活動する。そして社内向けに「ロンドン空港労務事情」を書いて話題になった。それを読んだ労働経済学の泰斗・名古屋大学の小池和男教授から日本的経営の実証研究として「中央公論」に紹介される。紆余曲折があり、結果的に「中央公論・経営問題」に一部紹介される。足元を掘れば時代とつながることが分かった。その後、1980年の中央公論の寺島論文を読み衝撃を受け、この男を目標・ライバルに勉強しようと決心する。

帰国後、知的生産の技術研究会で活動を始めた私は、『知的生産者の発想現場から』という本をつくろうとし、多摩大の北矢行夫先生の紹介で世田谷の寺島実郎を訪ねる。このとき、中央公論で読んだ論文の筆者がこの人だとわかる。それ以降、35年にわたり兄事する関係になり、ニューヨーク、ワシントンで仕事をした寺島実郎と、日本航空、知研、宮城大で定期的に接触し、そして多摩大では一緒に仕事をする事になり、現在に至る。

日野原重明「思うままに生きる――100歳の言葉」(PHP)

- ・世の中に「？」と「！」が両方あれば、ほかにはもう、何もいらないのじゃないでしょうかね？(まど・みちお。詩人。104歳)
- ・自分は世界で唯一の貴重な存在なんだと考えることが大切なんです。(新藤兼人。映画監督。100歳)
- ・うまい！(斉藤茂太。精神科医。90歳)
- ・生きるということは、身も心も忙しく働かせるということなのですね。(飯田深雪。アートフラワー創始者。103歳)
- ・いつも一歩下がって自分をきびしい目でまだまだだめと言っていないとね。(山田五十鈴。女優。95歳)
- ・もうひとつ向こう側に何かある気がする。(中川一弥。挿絵画家。104歳)
- ・「もうお前いいよ」と富士山が言ってくれるまで描き続けます。(片岡球子。日本画家。103歳)
- ・自分のいるところから見えるものを、自分のもつ方法で書くという態度は、変らずにきたつもりである。(吉田秀和。音楽評論家。98歳)

- ・鏡が私のお師匠さんなんです。(武原はん。日本舞踏家。95 歳)
- ・真に人の心をゆすぶることの出来る作者の身柄というもの、素人玄人を優に脱落したズブの「人間」それ自身でなければなるまい。(永田耕衣。俳人。97 歳)
- ・平和な仲のよい夫婦ほどお互いにむずかしい努力をしあっているbのだ、ということを見過ごしてはならないのです。(野上弥生子。作歌。99 歳)
- ・なるべく菜食。感触は一切しない。いつでも腹の中は風が吹いているように軽い。(宇野千代。作歌。98 歳)
- ・ともに喜ぶと喜びは二倍になる。ともに哀しむと悲しみは半分にな。(日野原重明。105 歳)
- ・長生きをするためには、まず第一に退屈しないことだと思うの。僕なんか毎日が忙しくて大変ですよ。本当に死んでるヒマなんかありませんよ。(物集高量。作歌。106 歳)

稲見昌彦「スーパーヒューマン誕生！」(NHK出版新書)

「人間拡張工学」は、超人の出現を可能にする。

スーパーヒューマン(超人)とは、拡張身体から人機一体、自動化と自在化、脱身体から分身、変身、融身体・合体へと至る人間の計り知れない進化の姿を示している。、、、すべてのテクノロジーが合わさるとき。人間は道具をつくるだけでなく、自らの身体性を自らの手でつくり変えることができる存在、つまりスーパーヒューマンへと姿を変える。

「人間拡張工学」とは、機器や情報システムを用いて、人間がもともと持っている運動能力や感覚を拡張することで工学的にスーパーマンをつくり出すことである。身体の内側と外側の両方に制御可能な領域を広げていく学問である。

身体とは脳と世界をシンク(同期)するためのインターフェースである。

視覚、聴覚は再現できているが、触覚や嗅覚はまだ再現できていない

土門拳「死ぬことと生きること」(みすず書房)

エッセイには本音がでる。自伝にも本音がでる。記念館を訪ねた時には、その人の業績となる著書はもちろんだが、そういう類いの資料を求めている。

本日は、写真家の土門拳の 65 歳で出した初のエッセイを紹介する。

土門拳のテーマは「日本的な写真を撮ること」である。そして「リアリズム」が写真の本道であるとの信念を持っている。そこから『日本の彫刻』、『室生寺』、『風貌』、『ヒロシマ』、『筑豊の子どもたち』、『古寺巡礼』などの優れた写真集が生まれている。

日本人としての自分自身が日本を発見するため、日本を知るため、そして発見し、知

ったものを日本人に報告するために、写真を撮り続けた。

土門拳は小学校時代から画家志望だった。中学を出て逓信省の日雇いになる。常磐津三味線の引きの内弟子、弁護士事務所の事務員、日大専門部法科の夜学を2年でやめる。24歳から2年ほど宮内幸太郎の内弟子で写真をやることになる。報道写真に焦点をあてた土門拳は、徹底的に独学で勉強した。写真の歴史と科学が読書のテーマだった。6畳一間に4人で寝るのだが、寝る時間を惜しんで写真関係の雑誌と単行本を500冊読み終える。寝床大学であったと本人が述懐している。またちょっとした休み時間にはカメラの操作の勉強にあてている。銀座の日本工房、名取り洋之助のもとで報道写真を勉強。国際文化振興会の嘱託。32歳、「写真文化」の作品に第一回写真文化賞を受賞する。

24歳頃に生涯のテーマ「報道写真」を意識し、それからの勉強の様子は鬼気迫るものがある。以下、語録。

- ・ 肖像写真は、その人らしい日常的な状況のなかで、動きの起こり始めた瞬間をとる。
- ・ 肖像写真は一つの間像でなければならない。その人間の過去と現在をまざまざと物語るいわば自叙伝でなければならない。
- ・ 気力は眼に出る。生活は顔に出る。教養は声に出る。
- ・ 年は後ろ姿に一番出る。
- ・ ライティングは、協調と省略の手段である。ロー・アングルは、モチーフを抽象する。ハイ・アングルは、モチーフを説明する。
- ・ シャッターを切った瞬間に、画題も浮かんでいる。
- ・ リアリズムは実践的課題である。

土門拳は、50歳で最初の脳出血。59歳で二度目の脳出血で車椅子生活に入る。この頃から名声は高まり、数々の賞を受ける。70歳、三度目の脳出血、それから11年間意識不明。72歳、土門拳賞創設。74歳、土門拳記念館が開館。80歳で永眠。50代以降は病気との闘いの中で、傑作写真を撮り続ける。その気力と写欲には頭を下げざるを得ない。

司馬遼太郎『韃靼疾風録(上)』(中公文庫)

九州平戸島に漂着した韃靼の貴人の娘を故国に送り届ける役目を担った平戸武士桂庄助が、女真族と交わりつつ自らの存在を問いかける物語。明、モンゴル、清、高麗、、、など東アジアの民族の興亡がみえる雄大なロマン。個人の側からみた東アジアがゆらぐ17世紀のアジアの歴史ゆらぎがみえる作品。大陸から日本がみえる。韃靼とは明がモンゴル人を卑しんで呼んだ呼称。大佛次郎賞受賞作品。

以下、日本、女真、明、朝鮮のこと。

日本：倭人伝。倭寇。古倭。北虜南倭。倭貨。倭館。壬辰の倭乱(秀吉)。倭銃。倭奴。倭将。倭人。日本府。倭人は主のみに従う。命を受ければ錐のように目的意識だけで生きようとする。頭髮。

女真：マンジュ(文殊菩薩)を信仰する種族をマンジュとよび、明人が満州という文字をあてた。女真のヌルハチは家康より17歳年下。58歳でハン。王朝は必要悪。女真30万人。朝鮮1000万。明は億人。姓をもたない。遞伝の組織がみごと。瀋陽は韃靼の都。後金。バートル(勇氣)。バートルのことか、英雄か？モンゴル人は北虜。大ハン・ホンタイジ(後の清の太宗)は大満州国と称した。東韃の女真人と北虜のモンゴル人の同盟。

明：朱子学は実状を忘れて論じ合い、問題解決の解決がなおざりになる傾向がある。野蛮人を討つ(攘夷)が朱子学の大義。小人とは身を勞する者、庶民・無学をさす。農民・商人・職人。君子は支配層で書を読む者、官僚士大夫。正義体系(イデオロギー)が濃厚。中国は地大博物。

朝鮮：朝鮮は明という虎に押さえ込まれ、満韃子(マンダーツ)という狼に咬まれている。朝鮮は去勢者を多く明に進貢した。明国以上に朱子学の国。文明とは人をして数奇たらしめない状態。野蛮とは数奇が大地に盛り上げた状態。

司馬遼太郎「断端疾風録」(中公文庫)

上巻を含めて久しぶりに司馬史観を堪能した。やはり司馬遼太郎は素晴らしい。

日本は、秀吉から家康、秀忠、家光の時代。

馬を鞭打って駆けるというイメージから韃靼と呼ばれていた女真が、ヌルハチ、ホンタイジを経て、親王ドルゴンが、明を倒した順に代わり「清」を樹立する時代。

この韃靼は明代には遼東と呼ばれていた。清朝では東三省、現在では東北地方と呼ばれている。日本では馴染みの深い「満州」である。

この女真族は50万、60万の人口でしかないのに、億を超える漢人の中華を200年以上に渡って支配した。

平戸の武士で密命を帯びて韃靼に渡った主人公の軌跡が、女真の英雄だけでなく、歴史が避けていく過程と関わりながら生き抜いていく姿を描くことによって、アジアの歴史の壮大なロマンを感じさせる素晴らしい作品だ。

2018年9月

小林秀夫「何がベンチャーを急成長させるのかー経営チームのダイナミズム」

(中央経済社)

史上最短で東証一部に上場した企業に、創業メンバーとして参加した経験をもとに、草創期の舞台裏をエスニグラフィで解明しつつ、ベンチャー参画によるキャリア形成も探究」。

成功したベンチャー企業では、トップのカリスマに焦点が当たる。しかし、実際はトップを中心とした経営チームが創業時代を牽引する。この経営チームの働きについて、自らの11年間の起業経験を題材に理論化した労作だ。

トップ個人、10人ほどの経営チームの形成、人間関係の変化、社内政治の登場、ストックオプションを手に入れている創業・経営チームとそれ以外の社員との軋轢、常態ともなった危機の連続、そして株式上場、、、。この間の実態を観察、インタビュー、経営理論などを用いて丹念に追っている。トップの個性への評価や批判なども率直に語られており、ノンフィクション的にも読める学術的色彩の強い注目すべき書物だ。

自分にとって重要な、30代半ばから40代半ばにかけての創業経験というキャリアを十全に総括し、そして学者としての出発を宣言した書になっている。

起業というとハードルが高くなるが、創業時の経営チームへの参画者を増やすことが重要だとの指摘は納得感がある。人、物、金、情報、などの経営資源の専門家として創業時の経営チームに参加、参画することはキャリア形成の面でも大きな収穫があることがわかる。

起業、創業時のダイナミックな動きに参加しようとする人材が増えることに、この本は貢献するだろう。またわが大学の次のステージを考える際にも、大いに参考になる。

中澤日菜子「ニュータウンクロニクル」(光文社)

1971年、1981年、1991年、2001年、2011年、と10年ごとのニュータウンを描写し、2021年の姿を描いた小説。この間の時代と社会の動きが上手に描写されている。

高卒でニュータウン(多摩ニュータウン)のある市役所(多摩市役所)に入り都市計画課に配属された18歳の主人公は、50年後の2021年には68歳で、シルバー人材センターで働いている。

50年前に「社会をより良くしていこう」という志を持って活動し、一度は活動を休止した「ニュータウンの未来を拓く会」は、40年後に再び活動を開始し、2021年には小学校跡を使って、格差社会の中でこぼれた子ども達を主な対象とした「ひまわり食堂」をオープンしている姿がある。「倒れた老木からひこばえが芽吹くように、鳥の運んだ種が遠い地で花咲かせるように」。

そしてニュータウン再生計画が未来へ向けて着々と進んでいる。「町も、そしてひとも「いのち」を繋いでいく」という結論になっている。

私は2008年からニュータウンの一角にある多摩大で働いているから、その前の時代はよく知らない。この小説でこのニュータウンに入居が始まった時代からの数十年間の具体的な暮らしのイメージが理解できた。大震災の起こった2011年から6年経った時点に今立っているのだが、多くの関係者が協力してこの小説に描かれたよりはもっとダイナミックな姿をみせたいものである。

岡田英弘「世界史の誕生ーモンゴルの発展と伝統」(ちくま文庫)

東洋史、西洋史、世界史、日本史、万国史、などを統合した、筋道の通った世界史を新たに創り出すことを目的とした、意欲的で問題の書である。

1206年のチンギスハンのモンゴルの台頭が世界史の最大の事件で、世界史の始まりとする。

東は日本海・東シナ海から、西は東アジア、北樞アジア、中央アジア、西アジア、東ヨーロッパの大陸部の大部分をモンゴル帝国が覆った。

インド人、イラン人、中国人、ロシア人、トルコ人という国民は、モンゴル帝国の産物であり、遺産である。資本主義もモンゴル帝国の遺産である。

大航海時代は、大陸帝国から海洋帝国への世界利権移行の大きな運動であった。

・歴史とは、人間の住む世界を、時間と空間の両方の軸に沿って、それも一個人が直接体験できる範囲を越えた尺度で、把握し、解釈し、理解し、説明し、叙述集津営みのことである。

・歴史は地中海世界では『ヒストリア』を書いたヘロドトスと、中国文明では『史記』を書いた司馬遷、という二人の天才がつくりだした。『ヒストリア』は定めなき運命の変転を記述するのが歴史であり、弱小ギリシャがアジアのペルシャに勝利する物語である。アジアに対するヨーロッパの勝利が歴史の宿命という歴史観。『史記』は皇帝という制度の歴史を描く。権力の起源と由来を語る。天下(世界)。天命(最高神の命令)。地中海世界では変化を主題とする対決の歴史観。中国文明では変化を認めない正統の歴史観。

・中央ユーラシア世界の草原の民の活動が、中国世界、地中海世界とヨーロッパ世界の歴史を動かした。13世紀のモンゴル帝国がユーラシア帝国の東西の交流を活発にし、一つの世界史が誕生した。

・モンゴルによる世界史の誕生。4つの意味。1:世界史の舞台を準備した。2:以前をご破算にモンゴル帝国から中国、ロシア、アジアと東ヨーロッパ諸国など新しい国々が分かれ、生まれた。3:北シナの資本主義経済が世界へ拡がり現代の幕を開けた。4:モンゴル帝国がユーラシア大陸の利益を独占したため、取り残された西ヨーロッパと日本が海上貿易に乗り出し、歴史の主役が大陸帝国から海洋帝国に変わっていった。

杉山正明 「モンゴル帝国と長いその後」 (講談社学術文庫)

昨日の『世界史の誕生』と同じ思想で、世界史の興亡を描いた力作。

- ・モンゴル帝国はアジア(日いずるところ)、ヨーロッパ(日没するところ)、アフリカの「アフロ・ユーラシア世界」を緩やかにまとめあげた。全体像を持つ世界史が誕生した。旧世界の陸と海の大半がつながった。これ以降、モンゴルの国家システム(暦・暦学・天文学・数学、)がユーラシアに共通するスタンダードになる。
- ・スキタイ・匈奴から始まる遊牧国家は、多民族・多文化・多地域をつつみこむハイブリッド国家だ。近代国家のようなナシナリズムや排他性はない。モンゴル帝国の特徴は、人種・民族・文化・言語・宗教などの違いによって人を区別することが希薄だったことだ。支配はゆるやかで、徴税も低率。信教は自由。
- ・チンギスハン(1206-1267)。オゴディ(1229-1242)。グユク(1246-1248)、モンケ(1251-1259)。クビライ(1260-1294)。チンギス、オゴディ、そしてクビライは 30 年をかけてモンゴル世界連邦のかたちを整えた。
- ・1492 年のコロンブスによる航海はクビライの巨大帝国への旅だった。
- ・モンゴル時代の後半期の日本は「日元貿易」で大陸との一大交流が行われた。茶道、能、書院造り、儒教・仏教・道教の知的体系、漢文典籍とそれを模した五山版、、、など日本文化の基層はほとんどこの時期に導入・展開したものに発している。東福寺など有力寺社が商船を仕立てて交易をした。
- ・20 世紀の初めの第一次世界大戦の前後に一斉に消えた諸帝国は、いずれも 13・14 世紀のモンゴル帝国とその時代に、起源・由来を持っている。ロマノフ朝ロシア(1917 年消滅)、オスマン帝国(1922 年)、大清帝国(1912 年)、ムガル帝国(1858 年)そして神聖ローマ帝国の流れを汲むドイツ帝国とオーストラリア・ハンガリー帝国(1918 年。ハプスブルグ家)である。

塩野七生 「日本人ヘーリーダー編」 (文春新書)

- ・危機の打開に妙薬はない。、、「やる」ことよりも「やりつづける」ことのほうが重要である。
- ・私は原典主義である。、、史実そのものにじかに当るというやり方だ。
- ・年に一巻ずつ刊行して、15 年かけてローマ全史を書くときめた。
- ・重要な問題ほど、単純化して、有権者一人一人が常識に基づいて判断を下す必要がある。
- ・ユーモアのセンスは臨機応変のセンスとイコールな関係にある。

・石井米雄:歴史認識は共有できない。しかし「歴史事実」は共有できる。

池上彰・佐藤優『大世界史』(文春新書)

- ・モンゴルはチベット仏教の国。13世紀、モンゴル帝国を築いたときに、チベット仏教に帰依している。、、モンゴル帝国は寛容だった。
- ・沖縄系のハワイ移民は、日本人ではなく、沖縄人という意識がある。、、アメリカは高等教育機関である琉球大学を創設した沖縄のエリート層は占領期から地場エリートの養成を考えた。だからアメリカに対し、比較的好印象を抱いている。大田昌秀知事はアメリカ留学世代、仲井真知事は沖縄卒で東大に入っている。
- ・現代のリベラルアーツ。宗教・宇宙・人類の旅路・人間と病気・経済学・歴史・日本と日本人。偏見や束縛から離れて自由な発想や思考を添加できる。
- ・おとなの教養。私たちはどこから来て、どこへいくのか。自分の立ち位置を知るには教養が必要。現代人必須科目は「日本と日本人」だ。教養とは自分を知ること。日本人、人類、。。

伊藤洋一「情報の強者」(新潮新書)

・iPhone でプレゼン。自分で撮影した動画、ユーチューブ動画。講演は iPad mini。

高峰秀子「おいしい人間」(潮出版社)

神保町の古本屋街をブラブラして、本を買い込む。

その時の問題意識という目があるからだろうか、向こうから本のタイトルが飛び込んできた。一つは「漱石の俳句」、もう一つは女優・高峰秀子のエッセイだ。

昨日の「名言との対話」で高峰秀子を書いたのだが、そこで彼女のエッセイが素晴らしいことを発見した。その目が「おいしい人間」を見つけた。本屋を巡る愉しみはここにある。

エッセイでは筆者の人柄、日常の生活、周囲の人物評などが出てくるので、楽しい。この人は女優であり、夫は映画監督であったので、著名な俳優などが出てくる。

丹下左膳を演じた大河内伝次郎については、次のように書かれている。

「優れた俳優は、物の教えかたも要領を得て上手い」「が、大河内さんだけは本身を使う」「不器用な人で、おまけにド近眼」「きびしく名刀のような人だった」、。。

司馬遼太郎「先生は美男である(いささか蒙古風)」。安野光雅「先生も美男である(いささかインディアン風)」。こういう対比や、人間性があらわれるエピソードを書く筆致は実に楽しい。

自分についてはどうか。

「年中無休、自由業」「白黒をハッキリさせたい性質(たち)の私」「女優の仕事は、そと目には華やかでも、私にいわせれば単なる肉体労働者である」「30歳のオバサン女房が夫をつなぎ止めておきには「美味しいエサ」しかない」「なんいごとにつけても、自分自身の眼や舌でシカと見定めない限りは納得ができない、という因果な生まれつきの私」「「食いしんぼう」「春先には蒨のとうの風味を味わい、夏には枝豆の爽やかな緑を楽しみ、秋には茸、冬には鍋ものと、ささやかでも季節そのものをじっくりと楽しめる、、」「私のヒイキは、なんといっても「内田百閒」だった」「私は、自分が下品なせいか、上品なものに弱い」「人づきあいはいはしない。物事に興味を持たず欲もない。性格きわめてぶっきらぼう」「独断と偏見の固まりのような人間」「どんな知人友人でも死顔だけは見ないことにしている」

400本の映画に出演した大女優は、名エッセイストだったことを納得した。沢村貞子もそうだったが、「目」がいい。

志村ふくみ「一色一生」(講談社学芸文庫)

染織家の名匠・志村ふくみは、すぐれた文章家でもある。

それを示したのが、大佛次郎賞を受賞したこの「一色一生」である。

「色と糸と織と」「一色一生」「糸の音色を求めて」「かめのぞき」「天青の実」と題する1章。「織 探訪記」「住まいと影」「今日の造形 織と私」「プレ・インカの染織を見て」「呉須と藍」「ルノアールの言葉」「老陶芸家の話」「蚕」「景色」と題する文章の並ぶ2章。例えば「色と音」は、「今日は夕刻まで色とたわむれていた。」「話し合うような、たわむれるような、時には鍵盤をたたいて、余韻をたもしむような気持ちがあるのである」「その色の一つ一つが純一に自分の色を奏でていることだ。色にも音階(色諧というべきかもしれない)があつて、、、」「四十八茶百鼠」「その卓抜した感覚こそ日本人そのものである」「染めは色の純度を守るためにあるようなものだ」、、というような珠玉の言葉で連なっている。和歌的な感覚と洞察に満ちた哲学が込められている。

読者はこの名匠の染織の着物を味わうように、深い言葉の世界に引き込まれていく。

さて、しかし、この本では3章が心に残った。

それは、志村ふくみがいかに成立したかがわかる壮烈な自伝である。

養父母に育てられた志村は、出生への疑惑にさいなまれながら、18歳で実母のから打ち明けられ、その実母から機織り世界に導かれる。

昭和31年から32年にかけての「日記」が載っている。東京に夫と子供をの残して近江の実家に帰った。織物の修業にはげみ、幼子と暮らせる日を願った。32歳だった。

「死物狂いでこの道を行こう。」「流れに逆らって一人漕いで行かねばならない。まがうことのない破壊を一方で行いながら、孤立の陣をはってゆく。仕事すすべてだ。生きて、

夫や子供と別れることが出来たのだから、これ以上辛いことはよもやあるまい。」
「ふっくらとした色の盛り上がり、きりきりっと全体の引き締まる色合、雪や、大地や、石の上の苔や、そのものの肌ざわりまで感じさせる色、落葉の色、葡萄の色、露草の滴の色、物思わしげな色、艶やかな色、がっしりした色、無垢な色、小粋な色、ひと恋しい色、消え入りそうな色、日影の色、思い出の中に生きる色、夢の中でみた色、燃えている色、沈んでいる色、濡れた色、透けた色、何という色自体の多様さだろう、、、一つ一つをかけがいのない、納得のゆく色でこれからの人生を描いてゆこうと願う。」
木工家・黒田辰秋のアドバイスも圧巻だ。

「自分のように我がままで、怠け者で不器用な人間は、こつこつ仕事をしてゆくしかない。、、、ただあなたがこの道しかないと思うならおやりなさい。まず自分の着たいと思うものを織りなさい。先のことは考えなくていい。ただ精魂こめて仕事をするだけです。「運、鈍、根」とはそういうことです。何年も何年も黙々とひとりで仕事をつづけてゆけるか、中みがよっぽど豊かで、ぬきさしならぬことでなければ続かないものです。」
車を下りたら猛烈な吹雪で一寸先も見えなかった。志村はその中を走りながら「仕事をしよう。仕事をしよう」と叫んでいた。

染織の世界で前人未踏の境地を開き、かつ内面世界を詩情豊かに綴っている志村ふくみの仕事は、多くの女性達に勇気を与え、日本の深さに思いを至らせる。志村ふくみの長い仕事に、文化勲章をはじめとする数々の名誉のある賞が与えられていることに深く納得する。

山本周五郎「泣き言はいわない」(新潮文庫)

- ・人間にとって大切なのは「どう生きたか」ではなく「どう生きるか」にある。
- ・人間が大きく飛躍する機会はいつも生活の身近なことのなかにある。
- ・大切なのは為す事の結果ではなくて、為さんとする心にあると思います。
- ・持って生まれた性分というやつは面白い。こいつは大抵いじくっても直らないもののようなものである。
- ・酒も遊びも、そのものは決して悪くはない。それが習慣になる事が悪いのだ。
- ・人間の一生で、死ぬときほど美しく荘厳なものはない。その人間が完成する瞬間だからであろう、、、それぞれの善悪、美醜をひっくるめた一個の人間として完成するのだ。
- ・大切なことは、その人間がしんじつ自分の一生を生きぬいたかどうか、という点にかかっているのだ。
- ・仕合わせとは仕合わせだということに気づかない状態だ。
- ・世間は絶間なく動いています。人間だって生活から離れると錆びます。怠惰は酸を含んでますからね。

・およそ小説家ならだれでもそうであろうが、書いてしまったものには興味を失うものだ。

楠木新「定年後」(中公新書)

今、話題の書。60歳から74歳を対象とした書。人生の本当の黄金期はこの期間。

男性の2割は70歳になるまでに健康を損ね、重度の介護が必要になる。7割は75歳から徐々に自立度が落ちていく。1割は90歳近くまで自立を維持する。(全国高齢者調査)。女性は9割近くが70代半ばから衰えていく。

元気な人の共通項は若い人に何かを与えている人、次世代に継承している人だ。教育関係に取り組んでいる(大学で教えている)。若い人に役立つことをやっている(NPOなど)。若い頃の自分を呼び戻している(楽器演奏)、。そして現役であることがすべてに勝る。

以上がこの本の結論だが、参考文献に以前読んだ城山三郎『部長の大晩年』と内館牧子『終わった人』が挙げられていた。以下、読書記録から。

『部長の大晩年』。三菱製紙高砂工場のナンバー3の部長で終えた永田耕衣(1900-97年)は若い時から俳人であった。55歳で定年を迎え、毎日が日曜日の40年以上に及ぶ「晩年」の時間を俳句や書にたっぷりと注ぎ、そして97歳で大往生する。城山三郎の傑作「毎日が日曜日」を豊かに生きた人物の伝記小説だ。以下、常の生活ぶりを記す。句作とエッセイや評論の執筆。主宰する俳句誌の編集。東西の哲学、宗教、文学の読書。書画の制作と収集。骨董と古物の収集と観賞。謡曲と、能の観賞。美術展、美術館めぐり。「大したことは、一身の晩年をいかに立体的に充実して生きつらぬくかということだけである。一切のムダを排除し、秀れた人物に接し、秀れた書を読み、秀れた芸術を教えられ、かつ発見してゆく以外、充実の道はない」。

内館牧子『終わった人』は、最後のどんでん返しが印象的である。89歳のお袋が団塊世代の息子に「66か、良塩梅な年頃だな。これからなってもできるべよ」と言う。「終わった人」どころか、「明日がある人」だったのだ。

紀田順一郎「蔵書一代」(松籟社)

副題は「なぜ蔵書は増え、そして散逸するのか」。12畳の書斎と3万冊の書物を収納した10畳半の書庫という52年間親しんだ理想的な環境から、新居に移るに当たって一気に本当に手元に置きたい最後の蔵書600冊に減らすという切ない体験から始まる愛書家の蔵書論。

紀田順一郎先生の書齋と書庫は、1980年代の始めに『私の書齋活用術』（講談社）という本を上梓するときに、「知的生産の技術」研究会の取材で伺ったことある。当時の若い私にとってまさに理想の環境だった。その書齋と書庫と惜別する物語である。蔵書は所蔵者の生涯と営為の結晶であり、ある意味で創作であるから、その解体は自らの死に相当するかも知れない。

著者の紀田順一郎先生は1935年生まれ。慶応義塾大学を出て、総合商社（日商岩井）に勤務。30歳で退社し著述業に専念。以降、書誌学、メディア論を中心に精力的に執筆活動を行う。2017年現在、82歳。

読書家と言えるのは1万冊が目安だと思ってきたが、スチール製書棚（185C・間口80C）で40本が必要であり、六畳間で四部屋が必要という試算になっている。1万冊以上の蔵書の維持には、不動産価格が高いため金力と本の移動や処分のための体力が必要だ。私も1万冊という目標を持っていたが、これはやめた方がいいかもしれない。

この本に記されている著名人の蔵書数が興味を惹いた。

井上ひさし 14万冊（山形の遅筆堂文庫）。谷沢永一 13万冊（関西大学の谷沢永一文庫）。草森紳一 6.5万冊（帯広大谷短大の草森紳一記念資料室）。布川角左衛門 2.5万点（国会図書館に布川文庫）。大西巨人 0.7万冊。渡部昇一 15万冊。立花隆 3.5万冊。山下武 2万冊。江戸川乱歩 2.5万冊。（徳富蘇峰 10万冊）

個人の蔵書として出発したものが、個人的な目的から発展し、同学の士の参照に資することを意図し、それが「文庫」となる。

新しい動きとして以下の紹介がある。

-シェア・ライブラリー：東京渋谷 co-ba library。赤坂。

-集合書棚：成毛真（HONZ代表）提案。神田神保町。オフィスや店舗の空きスペースに共同の書棚。

新百合ヶ丘の住宅地に建つ一戸建ての2階を全部使った、知的生産者垂涎の理想の書齋と書庫を擁した紀田順一郎先生の「蔵書」は一代で終わったという著者の哀しみと嘆きが伝わってくる本である。参考になった。

東京やなぎ句会編「友あり 駄句あり 三十年」（日経新聞社）

1969年に始まったこの句会が30周年を迎えた1999年に出版した本。

句会のメンバーは、入船亭扇橋を宗匠に、永六輔、大西信行、小沢昭一、桂米朝、加藤武、長井啓夫、柳家小三治、矢野誠一、江國滋、神吉拓郎、三田純一市がメンバーだった。毎回の記録を完全に管理していたのは江國滋であり、そのおかげで本になった。

会則がある。会費は 2500 円。30 分を越える遅刻者は罰金 1000 円。欠席者は代理人(女性)を立てるがその甲斐性なきものは罰金 5000 円、、、)

JAL時代に縁のあった 3 人の故人、永六輔・江國滋・神吉拓郎を追うことにしたい。3 人とも東京生まれのシティ・ボーイで、生年、神吉は 1928 年、永六輔は 1933 年、江國は 1934 年である。1984 年の句会中には、神吉に第 90 回の直木賞受賞の通知がもたらされる。

第 332 回(1997 年 2 月 17 日)では、江國は癌を告知されたことを報告している。「石田波郷を凌駕する癌俳句の金字塔に挑戦する」「やなぎ会の全員に自分の口から報告できてこころの底からほっとした」「長い一日だったが、快い一日でもあった」。「おい癌め酌み交はそうぜ秋の酒」は絶唱だ。

江國滋(江さんは台湾から来た。日本語はペラペラだし、冗談もいう。文章などは日本人ハダシである。句を考えている顔なんか、実にいいのだ。、、、という、みんな本気にするのだ(神吉拓郎))。

- ・大いなる繁栄ここに日本忌
- ・セル着れば死んだおやじよの句ひかな
- ・いじらしき牛乳瓶の上の雪
- ・勲章はペンだこ一個文化の日
- ・東京の夜の旧家の走馬灯(神吉拓郎追悼句会)

「このやなぎ句会こそ、何をかくそう、わたしの学校であったなあ、、、月に一度、欠かさず顔を合わせるあの連中たちに、俳句よりもっと大きなものを教わり続けて今に至っている」

神吉拓郎

- ・亡き人のうわさ楽屋の火鉢かな
- ・牡丹咲けわがよき人の笑むごとく
- ・屈託や目刺のわたのほろ苦く
- ・ふりむける鹿の目淡き色をして

永六輔(ご存じアサダアメの手先。種田山頭火に傾倒して、自由律の句一本槍、その出来映えには、師の山頭火も、あの世で頭をかかえているだろう(神吉拓郎))

- ・寝返りをうてば土筆は目の高さ
- ・哄笑も微笑もあって友偲ぶ(神吉拓郎追悼句会)

この句会は、吟行が多い。名前を聞いただけで旅情を誘う。こういう旅は旅名人の永六輔さんの推薦だった。

高尾、信州、安土、城ヶ島、秩父、日立、博多・柳川、富山、信濃追分、上州安中、摂津池田、諏訪、名古屋、青梅、箱根、浅間温泉、伊豆下田、山梨橋倉温泉、盛岡、松山、佐倉・成田、横浜、近江長浜、伊勢桑名、香港・ジャカルタ、台湾高雄・台北、小倉、伊豆大沢温泉、熊本山鹿温泉、佐渡、ハワイ、大分臼杵、ベトナム・ホーチミン、

大分竹田、内房富浦、松阪、気仙沼、、、。

この本の副題は「恥多き 男づきあい 春重ね」だ。うらやましい。

2009年の40周年には『五・七・五一句宴四十年』を刊行、そして2013年には『友ありてこそ、五・七・五』を刊行しているから、。まだ続いているようだ。2019年には50周年を迎える。大したものだ。

2017年10月

山野正義「ジェロントロジー」(IN 通信社)

老年学、加齢学と訳されている、1970年代から発展した「ジェロントロジー」に関する本を何冊か購入し手にとってみたが、「美容」という視座から論じたこの本がわかりやすかった。著者は山野美容芸術短大を傘下に持つ学校法人山野学苑総長。中心より、脇から見た方が本質がみえる、ということかも知れない。現在、167ヶ国の大学にジェントロジー学科が設置されている。

ジェロントロジー。

- ・生涯にわたる人間の発展と加齢の研究。老化にかかわる諸問題について、医学・心理学・経済学など多くの分野の連携によって解決を探究する学際的な学問。
- ・老化の意味を、身体、精神、社会面から総合的に研究し、高齢者が生き生きと暮らせる社会をめざす。
- ・老年学。高齢社会の人間学。老化防止研究学。
- ・湯かな高齢期を過ごすにはどうしたらよいかを追求。政策、社会、治療法、ライフスタイルの提案を設計する学問。
- ・学際的:高齢者医療。生理。心理。生活行動。政治。経済。社会・文化。人間関係。労働・退職。家計。住居。介護。死・倫理。
- ・人々が健康な心身をもち、最後まで豊かに人生を送ることができるよう支援するのが目的。

・ギリシャ語で老人を意味するジェロンから派生した老齢を意味する接頭語「geronnt(o)」と学問を意味する接尾語「ロジー(logy)】」連結させた造語。

南カリフォルニア大学(USC)デイビス校ジェントロジー学部。日本向けプログラムは60講座。ジェロントロジー・オンラインコース。日本語字幕スーパーと英語。自宅で学べる。身体・精神・社会。4ヶ月の修了者が多い。2000人が卒業。USCデイビス校から修了証書。山野学苑GCCからジェロントロジー学指導員の資格付与。

ジェロントロジストとは、心理学・社会学・生物学の3つの分野をまたぎ研究する人。

平成21年、東大高齢社会総合研究機構(鎌田實機構長)。平成23年、東大産学ネッ

トワーク・ジェロントロジー。

母親の山野愛子(1909年1月20日 - 1995年7月31日)は身分の低かった「髪結い」の国家資格を持つ「美容師」に変革させた人物。16歳で美容師の道に入り、全国各地に山野愛子美容室を展開。平成4年に世界初の美容の高等教育機関・山野美容芸術短大を83歳のときに創設した。享年86。 cosmetology(美容学):美道五大原則「髪、顔、装い、精神美、健康美」。「人生いつも八合目」「本当の楽しみは60代から」「本日誕生!」。美道は菩薩道。吉行あぐり(1907年生。美容師。107歳で他界)が店を閉めたのは97歳。

以下、参考になる言葉。

- ・知恵は知識と経験の蓄積によって創られる。
 - ・常に動き回っている。好奇心。オープン。ドキドキワクワク。
 - ・超高齢化ゾーン(90代後半から100歳代)では、幸福感が深い。老年的超越。
 - ・ブルーゾーン(100歳超の高齢者が多い):イタリアのサルデーニア、ギリシャのイカリア島、コスタリカのニコヤ半島、カリフォルニア州ローマリンダ、日本の沖縄。9つのルールで生活すると平均寿命より14年長く生きる可能性あり。
 - ・生きがい=朝起きる理由。・GNP=元気、にこにこ、ポックリ。
- ジェロントロジーには、私のテーマである「図解」(アタマの革命)と「人物」(ココロの革命)も大いに貢献できると思う。

齊藤博子 『間門園日記(まかどえんにつき)ー山本周五郎ご夫妻とともに』 (深夜叢書社)

神奈川県近代文学館で開催されている企画展を訪問する準備として、山本周五郎に関する本を読んだ。

横浜市の旅館・間門園には山本周五郎が創作の場として独居していた離れ家があった。そこで2年弱、秘書として仕えた著者の日記である。山本周五郎61歳から63歳で、著者は27歳から29歳。素顔の山本周五郎がわかる本だ。

山本周五郎の日常と人生観がよくわかる。そこに絞ってピックアップしてみたい。

- ・いわれてからするのは用ではない。
- ・僕は物書きですから全部作品の中でいいです。
- ・食べ物だけは「ぜいたくさせてね」
- ・女性の出産より苦しいよ。
- ・人生は点のように短いものだから一日を大切にするんだよ。僕の人間を見る眼を良くみておきなさい。

- ・恵まれなかった生涯と合わせてベートーベンの作品が好き。
- ・家庭に入ったら働いてはいけない(収入を得るな)男が駄目になる。
- ・人間は弱いから温かい環境には仕事ができない。仕事を別に持って独居している。
- ・日本酒は醸造だから体に悪い。飲むならウイスキーに。保証人の印だけは押しはけない、お金を貸すならあげるつもりで貸すこと。
- ・より多くの人に意味がわかって読んでもらえる本が良い。ヘミングウェイをみなさい。
- ・女優には会わない。将来性のある男の人には話をする。
- ・自分の作品には挿絵はいらない。
- ・食生活で健康の90%は維持できる。
- ・時代物を書いているつもりはない。本当のことでなければ書かない。
- ・日本の作品は僕と島尾敏雄を読めば良い、あとは外国の作品を読みなさい。日本は島国で視野が狭いから。
- ・人間関係ができるとその人を通じての仕事を尊重する。
- ・酒をうまいと思って飲んだことはない、誇張していえば、いつも毒を飲むような気持ちだった。
- ・相手のためになること、正しいと思うことは立場を無にしていうこと。
- ・多くの人に読んでもらえる安い価格の文庫を好む。
- ・作家を志す者は毎日書け。書く習慣をつけること。同業者が集まっても得るものがない。そんな時間があつたら下町を歩いた方がよい。
- ・お金は貯えるものではない。お金は使うためにある。
- ・座右の銘はストリンドベリーの書「青春」より。「苦しみつつ働け、苦しみつつなほ働け、安住を求めな。この世は巡礼である」
- ・文壇で現役でなければ生きていたくない。
- ・僕には一生書き切れないテーマを持っているので時間がない。
- ・五十を過ぎた「ながい坂」を読んでごらん。僕の書いたもののなかで最高の作品だよ。
- ・山本質店では物干しにごぎを敷いて勉強した、僕のように総て独学の作家はもう出ないでしょう。
- ・僕の人生は失敗しなかったことが失敗だった。
- ・政治は庶民のことは何もしてくれないから関心を持ってはいけない。

中村圭介「絶望なんかしていられないー救命救急医ドクター・ニーノ戦場を駆ける」
(荘道社)

日本ではまだ数が少ない救急救命医の誕生と活躍の物語である。著者は1952年生ま

れの経済学者で東大社会科学研究所教授。

救急救命の専門医は、国内では事故、国外では戦争と難民発生時、災害発生時に、生命と身体を救う医者である。医学の課程を終えた後、外科3年、脳外科4-5年の経験が必要で、専門医になりには10年ほどかかる。その専門医のリーダーの新野宣文の人生の軌跡を追いながら誕生したばかりの「希望学」に迫ろうとした書物である。

医師は一生かけて治療できる人の数は2万人だ。災害医療支援活動では100万人、200万人という規模の数が治療の対象となる。そこではお金はとらない。だから貧乏人も金持ちも関係ない。真っ当に仕事をすれば、人がどんどん助かっていく状況にあり、医療の原点を感じることができる。その魅力に取り憑かれた先駆者が、この本で紹介されている新野である。

1949年生まれの新野は高校卒業後、3年を今でいうニートで暮らし、薬学部2年を経て一念発起して医学部に入り、9年半で卒業したのは30歳だった。医師国家試験にも2度失敗している。計算すると、日本医科大学附属救命救急センターで仕事をするのは32歳であり、8年間は遠回りしたことになる。

1988年緒ジャマイカのハリケーンでの活動で60件の手術。そして40歳で赤十字国際委員会ペルシャワール外科病院での経験での3ヶ月で818件の手術をする。1989年のアフガニスタン第一次内戦で発生した難民が対象だ。働き続けたとして平均すると一日9件である。ここでの経験で人生が180度転換する。1991年のイラク・クルド難民支援。1995年の阪神淡路大震災。2003年のイラク戦争前夜にはヨルダンのあアンマンで野戦病院設営の準備をしていた。2004年、インドネシアスマトラ沖地震の災害医療支援では、町中に死臭がする。人生は短いから好きなことをやろう、「偉くならなくていい、実際に人の役に立つことやろう」と改めて決心する。国内では2008年の岩手・宮城内陸地震、、、。

2003年から日本医科大学多摩永山病院救急救命センター長とありセンターを指揮する。この本が書かれた2010年からは教授として活躍している。

高齢者にセンサーを取り付けて脈拍が一定以上になったらアラームが自動的にセンターに知らせ、救急車が直行すると、心臓蘇生の可能性が高くなる。このシステムができれば、インターネットで指示しながら自分は難民キャンプにいることができる。それが新野の「希望」である。

私がこの本をなぜ読んだか。この本の主人公は、多摩大大学院でこの秋学期の講義中の私の「立志人物論」の受講生で、先日講義の後にいただいたからだ。団塊世代のひとつの生き方を他者が自分史風に書いてくれたものだが、これに自分自身で加筆していくと、自分が生きた時代、自分のやってきたことの意義、次の世代に残したいもの、そして自分はどう生きていくか、そういうことが自身にも、他の人にもわかるすぐれた自分史的作品になるのではないか。

佐藤一斎の「少壮老死」の思想そのものの人生の軌跡であると感じ入った。

人間の記録 89 「東郷青児」(日本図書センター)

最晩年の写真は功なり名を遂げたハンサムでかつおしゃれな人物で写っている。

それを眺めると女性にもてただろうと思わせる風貌だ。確かにこの本には数々の女性遍歴が記されている。また、若き日に山田耕筈の助力や有島生馬のおかげでデビューしたり、妻の父が虎の子のように持っていた寡作を売ってパリ留学費用を出してもらったり、留学中に命を助けた女性の配偶者の援助で貧乏生活に終わりをつげたり、何か運を持っているという印象だ。

この自伝によると、「女難の相」があると言われた東郷の波瀾万丈の女性遍歴とそこから引き出された教訓はなかなか興味深い。

人生については、「難破に難破を重ねてここまで来ると」「宇野千代と妙な仲になってしまい、彼女と同棲2年」「どうやらこうやら、絵でめしが食えるようになったのは45歳を過ぎてからのような気がする」と述べている。

『日本の名随筆』シリーズ「『人間』(多田富雄編)」「『定年』(山田智彦編)」(作品社)

『人間』は対象が広すぎて焦点が定まらず多田富雄が言うようにやや散漫な印象であるが、『定年』(1992年)はさすがに人生の機微に触れた名随筆が多い。夏目漱石、河盛好蔵、池田弥三郎、鈴木健二、安倍公房、柴田錬三郎、大宅壮一、青木雨彦、扇谷正造、土岐雄三、山口瞳、三浦朱門、城山三郎らの随筆は味がある。こういう随筆にむしろ「人間」や人生観が映し出される。

以下、参考。

柴田錬三郎「私の家の応接間には、自分の本だけをならべた棚がある」(これは実現したい)

大宅壮一の浪人生活秘訣三ヵ条「身なりをととのえること。会合には万障繰り合わせて出席すること。上等のポストン・バッグの類いを持って歩くこと」(参考にしよう)

杉村「新聞記者は、文章を書くたびにモノを覚えていく」(本を書くのも、ブログを書くのも同じことだ)

イタリアのロイ将軍「わたしは、生来の楽観主義者である。なぜなら、人間の馬鹿さ加減にも限界があると思っているからです」(この人に惚れた塩野七生の文章から。悲観する状況の中で、それを逆手にとって楽観する姿勢がいい)

奥本大三郎『子供の、「あれなーに、これなーに」が発展していくと博物学になる』

中村雄二郎「知らないこと、初めて出会うこと、驚かされることが多く、日々を新鮮に生きることができるあらである」(若いときは時間の流れが遅い理由)。「五感をつらぬき続

合する感覚、時間を感じるのはこの根源的な感覚だ」「旅先では共通感覚がいききと働く(五感「視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚」を働かせる日々が重要だ。旅美に出る。新しいことに挑戦する。)

加藤秀俊著作集 10 人物と人生」(中央公論社)

加藤秀俊が語った「人物と人生」は、今日の時点でも納得感が高い。若いときにも読んだと思うが、本当には理解できなかったのだろう。人生の秋霜を経てきて、改めて読むとうなずくことが多い。

- ・「生きがい」ある人生とは、プライドをもって生きることができる、ということである。
- ・「ショート・ショート時代」、時間的な持続力をもった人間が例外的な偉人として珍重される。、もしも何十年かの人生を通じて、なにごとかについての持続力をもつことができるなら、それは、とりもなおさず、「生きがい」のある人生であった、ということである。
- ・年月は恐ろしい。、蓄積は貴い。、だいじなことは、その蓄積をじぶんの力でつくるといことである。自力でつみ上げていくことである。、コツコツと蓄積していくこと――そのプロセスが貴重なのだ、とわたしは思う。
- ・「責任ある仕事」とは、自由のある仕事、ということになる。そして自由度が大きければ大きいだけ、責任も大きくなる。
- ・もしも、未来社会がより「ゆたか」な社会で、すべての人間が、最低の文化的生活を保障されるようになるのだとすれば、少なからぬ数の人間が、職業生活から脱落して、のびやかに二十日ダイコンをつくるようになるだろう。(小松左京『そして誰もいなくなった』)。8万円の給料で働くよりは、5万円の社会保障をうけることを選ぶだろう。、こうした生き方によってつくられる文化を仮に「若隠居」文化と呼ぶことにしよう。
- ・東洋の思想は「縁」という観念によってこの「偶然」を必然化した。
- ・道というのは、「えらぶ」ものではなく、「見えてくる」ものであるらしいのである。それは、ひとつの丘をこえてみて、はじめて、つぎの丘が見えてくるのに似ている。こうしようとおもってこうなるのではない。こうしてみようか、とおもってやってみると、やってきた結果として、次がみえてくるのである。
- ・世界は無数の断片のちらばりによってできあがっている、茫漠たるものだ。その断片のひとつに手をつけてみると、それが手がかりになってつぎの断片が見えてくる。そんなふうにして、いくつかの断片が見えない糸でつながり、関係づけられてゆく。、このアマダくじ的世界観にもとづく作業の過程という以外のなにもんでもない。断片と断片を糸でつないでゆけば、ひよっとして、首飾りのようなものができるかもしれないが、。
- ・毎日が選択肢の連続だ。こう、と決めたら、それでやってみよう、とわたしはいつもおもっている。そしてどうにかなるさ、と信じている。ほんとうに、どうにかなるものだ。

・将来、すこしずつ人間というものをより深く学びつつ、この領域(評伝・伝記)でのしごともつづけてゆきたいとかがえている

関厚夫「次代への名言――時代の変革者編」(藤原書店)

司馬さんのあしあと:「坂の上の雲」「竜馬がゆく、の風景」

日本の品格:「武士道の系譜」「経営者列伝」「信長と秀吉」「晋作と松陰」

和華一如:「子、曰く」

著者は産経新聞の記者で、「名言」をテーマにしている人。

秋山好古「若いころはなにをしようかということであり、老いては何をしたかということである。」

正岡子規「人間のえらさに尺度がいくつもあるが、最小の報酬でもっとも多く働く人ほどえらいぞな。」

坂本竜馬「人間はなんのために生きちよるか知っちよるか? 事をなすためじゃ。」

西郷隆盛「イヤ生命(いのち)もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬ、と云った様な始末に困る人です。但し、あんな始末に困る人でならでは、お互いに腹を開けて、共に天下の大事を誓ひ合う訳には参りません。」

勝海舟「武士道は人道と云ふてさしつかへないよ。」

五代友厚「人と己の論、五十歩百歩なる時は、必ず、人の論を賞めて採用すべし。」

渋沢栄一「孔子を称して偉大なる平凡人というても適當であろう。」

徳川家康「天下国家を治めるものは、孟子をよくよく味ふべし。」

王陽明「人間というものは、現実にあぶつかって錬磨するという修行を経てはじめて、大きく前に進む。」

吉田松陰「吾れの得失、当に蓋棺の後を待ちて議すべきのみ

丹羽宇一郎「死ぬほど読書」(幻冬舎新書)

総合商社・伊藤忠商事の中興の祖であり、民間人初の駐中国大使を経験し、また読書人としても有名な丹羽宇一郎の読書論。

実家は本屋。60年安保の名古屋大学法学部時代は学生運動家。検察官か弁護士を志望していたが、伊藤忠商事に入社。若い時代から続く読書の継続と、仕事に立ち向かう徹底した現場主義がこの人の勉強法だ。

語り下ろしの読みやすい本。参考になる点をいくつか。

・アメリカ駐在中は、大豆を扱う部署。農業、歴史、政治、産業に関する本を読んだ。

- ・読書でゴルフのシングルプレイヤーになった。
- ・40年以上、毎日30分以上の読書。本を読むために電車の終着駅に住んだ。毎週3冊、年間150冊。
- ・重要なところはノートに書き写す。このノートは唯一無二の、座右の書だ。
- ・優秀な人間ほど、隠し事をする。
- ・問題があるということは、懸命に生きている証。
- ・人生で大事なものは、仕事と読書と人間関係。そこから学ぶ人間理解。

原田國男 「裁判の非情と人情」(岩波新書)

2017年度の日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した元東京高裁判事のエッセイ。「寅さん」シリーズの山田洋次監督が「こんな裁判官がいる限りこの国の法曹界を信じたい」と推薦している。文体は柔らかくユーモアがあるが、裁判をめぐる本質的な問題点を指摘している本です。コラム「裁判官の余白録」をまとめたものだ。

裁判官という知られざる世界の「人事」について垣間見える点が印象に残った。

- ・著者が尊敬する裁判官の一人は起案書を直さない、自分の意見を言わない合議、被告人に自由に語らせる裁判を行いながら指導を受けたこの人は、最高裁判事になった。
- ・無罪判決を続出すると、出世に影響して転勤や外されたりする。これも残念ながら真実である。
- ・後先のことなど考えずに、個々の事件にベストを尽くすべきだ。
- ・自由に意見を徴し、議論をすべきだ。自由な議論とは、何を言っても、人事上の不利益を加えないということである。
- ・「しぶしぶとしぶからしぶへしぶめぐり しぶのむしにもごぶのたましい」(裁判官としての不遇をかこつ歌)
- ・法曹一元(裁判官は弁護士から選ぶ)が望ましい。
- ・出世は目標ではなく、あくまで結果なのである。

以上の記述などを読むと、やはりこの世界も人事は最大の関心事であり、しかもその微妙な本音も見え隠れしている。どの世界も人事は一筋縄ではいかないようだ。

裁判は複数裁判官の合議であるから、質問を受けることがあり、手控えが重要だ。「読むだけで事件全体が把握できる」ものを書く。「全体を一覧できるチャートを作るのも一つのアイデア」だ。証拠の位置づけがすぐにわかる。、このようなことも書いている。私は裁判所で講演を頼まれたことがなんどかある。最高裁、東京高裁、仙台高裁、東京地裁、宇都宮地裁、横浜簡易裁判所だ。そこでは「図解コミュニケーション」をテーマに話をしたのだが、著者の全体を一覧できるチャートを教えていたことになる。裁判員

制度の導入前後であり、凶解に関するニーズが高まった時期だった。

著者や裁判官は文芸作品や小説を読むべきだ。なぜなら裁判官に欠けている、情と人情を勉強できるからだ、という。池波正太郎『鬼平犯科帳』と映画の山田洋次『男はつらいよ』シリーズをすすめている。

吉永祐介検事総長。龍岡資晃判事。香城敏磨判事。四ツ谷裁判長、石田穰一裁判長。、、以上のような尊敬する先輩の名前がでてくる。彼らに鍛えられて仕事を覚えていく。どこの世界でも同じだ。この本には「人間の器が違う」という言葉がでてくるのが印象的だ。仕事、趣味などトータルでみたその人の「器」である。器の大きい人に出会う喜びが仕事の喜びでもある。

著者には昔から法廷で面白いことがあると、すぐノートに書いておく習慣があった。ノートの題名は「法廷ちょっといい話」である(戸板康二「ちょっといい話」。また裁判官に取材してメモを取っていた。また長年の習慣は日記で、平成元年(1989年)から2017年まで続いているという。28年だ。「ノートと日記」がこの本の原材料となっている。

戸板康二「ちょっといい話」(文藝春秋)

有名人が起こすちょっと面白いエピソード集であるが、時間が経っているのでおかしさが分からないものも、ままある。共通のバックグラウンド、教養などがユーモアには欠かせない。

「各界名士 500 人の珍談・奇談集。直木賞作家・劇作家・評論家の著者が半世紀書きためた交友録から最高傑作を公開するユーモア笑事典」

「後記」から。「挿話に興味を惹かれる」「傑作は日記に要点だけ書きとめる」「最後は、落語のサゲのような一句」「幕末から明治大正」「二百字の原稿用紙に一話ずつ」

- ・日夏「われらの国語を、路傍の石のごとく動かすのはやめろ」(山本有三へ)
- ・川端康成「じゃ払わなきゃ、いいはありませんか」(吉行淳之介が「銀座のバーが高くなった」と嘆いたのに対して)
- ・遠藤新「君は代議士、ぼくも大技師」(星島二郎へ)
- ・野上弥生子は読んでいた本に赤鉛筆で文章を直していた。
- ・草野心平は「火の車」(税務署対策)と「学校」(家の人対策)という酒場を持っていた。
- ・瀬戸内寂聴「いいえ、私はアマです」(「プロって大変ですね」に対して)
- ・朝倉撰「いやだわ、元代々木だなんて」(元共産党員の朝倉撰が住んでいる町の名が改正)
- ・榎本武揚「まからねえか？」というよ、イタリアのレストランでは「マカロニ」を持ってきた。

- ・島崎藤村「君、死ぬってどんな気持ちがする？」(田山花袋に)
- ・佐々木邦「なるほど、翻訳家の家だ」(戸川秋骨の家は門から玄関までが洋風、中に進むと和風)
- ・久保田万太郎「いいえ、あなたの俳句は、退歩しています」(渋谷秀雄「私の俳句は一向進歩ませんで」)
- ・小沢昭一「光源氏の役以外は、出演しません」(テレビやドラマの出演を断る口上)
- ・「切腹」(小林正樹監督) 宣伝部「切腹もタケミツ、音楽もタケミツ」(刀は竹光、音楽は武満徹)
- ・菊池寛「文才のある文学青年ほど、困ったものはない」
- ・高浜虚子「選句は選者の創作です」
- ・武者小路実篤「雑誌にたのまれたら書く。ことわるより書く方が早い」
- ・山田耕筰「いい歌だなと思って聞いていたら、君ねえ、それは、ぼくの曲だったんだよ」

2017年11月

戸板康二「あの人この人 昭和人物誌」(文春文庫)

著者の戸板康二は77年の生涯の50年ほどの期間に172冊の著作を世に出した。演劇評論、劇評、随筆、小説、俳句など守備範囲の広い文人だった。「人物歳時記＋人物風土記」ともいべき珠玉のエッセイ集だ。34人の昭和史を彩る各分野で傑出した人物たちの見せる際だった個性を楽しみながら書いたものだ。この人は締めきりに遅れたことがないというのだが、本を読んでいくと苦しみながら書くのではなく、楽しみながら書いている姿が浮かんでくる。

取り上げた各人物にまつわるエッセイのネーミングが実にうまい。

江戸川乱歩の好奇心。徳川夢声の話術。有吉佐和子の笑い声。芥川比呂志の酒席。三島由紀夫の哄笑。川口松太郎の人情。田辺茂一の大鞆。花森安治のスカート。寺山修司の国訛。大谷竹次郎の劇場愛。渋谷秀雄の童顔。小泉信三のステッキ。東山千栄子の挨拶。

- ・乱歩は若い頃から自分に関する新聞雑誌の記事や読者からの書簡をファイルしスクラップブックに張り込むのが楽しみだった。それが『探偵小説40年』という大著の基本資料になった。年譜、作品年表、交友録を丹念に記録していた。乱歩全集は推理文庫で65冊。
- ・徳川夢声は1時間のひまがあると時間にかかわりなく映画をみて、本屋で何か買うという習慣。新しい話題を持っていたが、スキャンダルと猥談はしなかった。禁酒ならぬ

停酒。

・芥川比呂志は酒をいくらでも飲めた。芥川飲み介。渋谷の「とん平」、新宿の「五十鈴」、代々木の「なおひろ」。エッセイというものは、その人の人柄を、くつきりと浮かび上がらせる。(この本の他のところで出て来る店をピックアップ。銀座の「はちまき岡田」、出雲橋の「はせ川」、七丁目の「よし田(そば)、」

・獅子文六という筆名は、四四十六をもじったのではなく、文五(文豪)に一つ足したのだと笑っていた。

・田辺茂一。「夜の市長」。『わが町・新宿』には田辺のすべてが語られている。

・渋谷秀雄は訥々とした口調と童顔の人。父の栄一の遺伝か。

・玉川一郎。『シャレ紳士録』。秋深し水洗便所の音高く。

読んでいて、昭和の雰囲気と、その時代を生きた文化人たちのほのぼのとした味わいを感じる名著だ。

橋本卓典「捨てられる銀行2 非産運用」(講談社現代新書)

金融庁の動きに注目！

日本の家計金融資産は現在1700兆円にまで達している。一方で、1995年との比較では205年末でアメリカが3.11倍、イギリスが2.27倍であるのに対して、日本は1.47倍に過ぎない。この3年の200兆円の増加は株の押し上げ効果が大い。このうち、900兆円は眠ったお金の現預金である。年1%の運用で9兆となりGDP(530兆円)は1.7%増加となる。

日本の投資信託の規模は160兆円に過ぎない。購入時の手数料は3.2%で、アメリカ0.59%、信託報酬は日本1.5%、アメリカは0.28%であり、手数料負けになってしまう。しかも過去10年の平均収益率はマイナス0.11%だ。アメリカはプラス5.20%。これでは資産形成ではなく、資産搾取だったことになる。

年金積立管理運用独法(GPIF)は130兆円、郵貯近郷200兆円、かんぽ生命85兆円を合わせると政府関連の機関投資家の総額は425兆円に達する。

個人の資産運用こそが日本に残された成長産業であるとの考えから、金融庁は過去の失敗を反省し大改革中である。「資産運用のリターンが低い。手数料稼ぎを目的とした顧客不在の金融商品 sale。手数料水準やリスクの所在がわかりにくい」、こういった課題の解決のたえに、金融機関には顧客本位の業務運営を行うよう指導が始まっている。

機関投資家の運用先は日本国債中心であったのを、株式、外国株、外国債券への配分を高めたことによって、株式市場の成長と資産運用の発展を期して、日本における資金の流れを変えてきている。そのインフラのもとに、金融機関や家計資産の運用力を高めていこうとしている。

富裕層はプライベートバンキングなどを利用している。金融資産 1000 万円以下はインターネットを活用している。問題は、中間層だ。ここをターゲットとしたサービスはほとんど存在していない。

金融庁は金融機関へは「手数料等の明確化」「わかりやすい情報提供」「顧客にふさわしいサービス提供」などの顧客本位への転換を促す 7 項目の方向(フィデューシャリー・デューティ)を示している。これが踏み絵となっており、金融機関は選択を迫られている。こうやってみると、最近のみずほの 1 万 9 千人の人員削減などの動きは、この備えであろう。歴大な公的資金の運用改革の流れの中で、1700 兆円に及ぶ個人資産の運用が日本に残された成長産業となっていることは間違いないようだ。

磯田道史『司馬遼太郎』で学ぶ日本史 (NHK出版新書)

「あとがき」(『この国のかたち』と「あとがき」の後)、「二十一世紀を生きる君たちへ」「洪庵のたいまつ」は再読したい。また大阪の適塾も訪問することにしたい。山陽の『日本外史』と蘇峰の『近世日本国民史』も手にしたい。

国民作家・司馬遼太郎は歴史小説家ではあるが、むしろ「歴史をつくる歴史家」と呼ぶ方が正しくその実像を現しているというのが磯田の見立てである。

磯田が「歴史をつくる歴史家」という最大限の評価をしているのは、南北朝の興亡史『太平記』の作者・小島法師、武家の興亡史である『日本外史』22 巻を著した頼山陽、織田信長から始めて国民国家日本の成り立ちの歴史『近世日本国民史』100 巻をもつた徳富蘇峰、そして日本の歴史を書き換えた司馬遼太郎である。

司馬遼太郎は自身の軍隊経験をもとに、昭和前期に成立した軍事国家日本が、なぜ軍事力の暴走によって無謀な戦争で国を壊滅させたのかを明らかにしようとして『国盗り物語から始まる』戦国、幕末、明治の日本を描いた。

司馬史観によれば、大革命というものは、最初に思想家(吉田松陰)があらわれ非業の死を遂げ、戦略家(高杉晋作)の時代に入り、そして技術者(村田蔵六)の時代になり完成する。予言者、実行家、そして権力者(山県有朋)が順番にあらわれると同時に革命の腐敗が始まるのだ。

司馬遼太郎の明治国家観では、政治の薩摩、官僚の長州、自由民権の土佐、人材供給の佐賀、教育の会津、文化と技術の加賀、そういった多様な人材が明治政府に集合し、革命を成功させたということになる。江戸時代の遺産が明治に実ったのが明治維新である。明治の特色は格調の高いリアリズムの浸透であり、それは独創を生むリアリズム(秋山真之)と、不合理な精神主義のリアリズム(乃木希典)で構成されていた。

日露戦争で勝利をおさめた 1905 年から 1945 年の太平洋戦争の敗戦に至る 40 年間は鬼胎(鬼っ子)の時代である。その鬼胎の正体は輸入したドイツから輸入した参謀本

部に付着していた「統帥権」だった。統帥権は天皇が持つ海軍を指揮する権限であるが、陸軍参謀本部と海軍軍令部が運用した。この超法規的な統帥権が昭和になって化け物のように肥大化した。日本国の胎内にべつの国家一統帥権日本一ができたのである。

司馬遼太郎が生涯をかけて書き続けた歴史小説の「あとがき」が、『この国のかたち』であると磯田は言う。その「あとがきの後」が、『二十一世紀に生きる君たちへ』であり、『洪庵のたいまつ』である。

歴史家である著者が、鳥瞰的に司馬遼太郎を論じたわかりやすい、そして納得感の高い本になっている。この本は2017年5月発行で12万部となっているが、さらに売れ続けるだろう。

山本周五郎「泣き言はいわない」(新潮文庫)

山本周五郎ほど箴言の多い作家は珍しい。本の内容自体が箴言で成り立っていると言えるし、山本の酒じゃ説教酒で人生論が多く仲間からは敬遠されていたそう。その山本の小説の箴言のなかから編んだ箴言集である。

山本周五郎の人生の指針は、「苦しみつつ、なお働け、安住を求めるな この世は巡礼である」(ストロンドベリ)。スエーデンの作家・ストロンドベリは「最も大きく且つ尊く良き師であり友である」と『青かべ日記』に記されている。

以下、私の心に響いた言葉をピックアップ。

- ・人生は教訓に満ちている。しかし万人にあてはまる教訓は一つもない。
- ・人間がこれだけとは思いついた事に十年しがみついていると大抵ものになるものだ。
- ・大切なのは為す事の結果ではなくて、為さんとする心にあると思います。その心さえたしかなら、結果の如何は問題ではないと信じます。
- ・持って生まれた性分というやつは面白い。こいつは大抵いじくっても直らないもののようにある。
- ・能のある一人の人間が、その能を生かすためには、能のない幾十人という人間が、眼に見えない力をかしているんだよ。
- ・仕合わせとは仕合わせだということに気づかない状態だ。
- ・世間は絶間なく動いています、人間だって生活から離れると錆びます、怠惰は酸を含んでいますからね。
- ・養育するのではない、自分が子供から養育されるのだ、これが子供を育てる基本だ。
- ・およそ小説作者ならだれでもそうであろうが、書いてしまったもんには興味を失うものだ。
- ・人間が生まれてくるということはそれだけで荘厳だ。

・人間の一生で、死ぬときほど美しく荘厳なものはない。それはたぶん、その人間が完成する瞬間だからであろう。

長井実編「自叙益田孝翁伝」(中公文庫)

三井物産の初代社長。三井財閥を築き上げ、美術品の蒐集家としても著名な財界の巨頭の自叙伝。幕末から明治、大正にかけて、時代の出来事や経済人の逸話を中心に闊達に語っている。

佐渡の生まれの益田孝(1848-1938年)は、北辺雄の警備のために佐渡の地役人から抜擢された父(維新後は福沢諭吉の書記)の勤務する函館で英語も学ぶ。父が江戸詰になり、アメリカ公使館になっていた麻布の善福寺でハリスにも接し尊敬している。ハリスが唐人お吉を愛したのは噂であるとかばっている。父が使節の会計役として随行するときに同行しフランスに行く。そして横浜で英語修行の後に幕臣として騎兵隊のリーダー格となる。辞令は江戸城で徳川慶喜将軍から直接もらっている。

明治になり経済界で活躍する。海外貿易を志して三井物産を設立し初代社長となり、三井財閥を築きあげる。また日本経済新聞の前身である中外物価新報(後に中外商業新報)を創刊した。

60歳で三井合名理事長であった益田は辞意を表明し、団琢磨を後任者に推薦して66歳で引退する。「老いの身にあまる重荷をおろしては またわかへる心地こそすれ」引退後は、数奇者として、茶人として「鈍翁」(蒐集した茶器「鈍太郎」に由来)を名乗り、千利休以来の大茶人と称された。また茶器の蒐集家としても一家をなした。

益田孝は青年期から壮年期は三井を率いて日本経済の重鎮として活躍し、引退後の24年は文化人として重きをなした人物だ。

参考

・江戸幕府の瓦解。幕府には人物がなかった。薩長には人物がいた。働いている人物の決心が違った。(人物の差)

・貿易ではイギリス人やアメリカ人に負けない。しかしユダヤ人は細かい面倒な仕事でもよく勉強している。実に恐るべき人間だ。彼らに競争して勝たねばならない。(ユダヤ人恐るべし)

・三菱、古河、久原など天下の金持ちは商売をやったが、みな失敗している。三井は三野村利左衛門などが人間を養成してあったので成功した。(人の三井)

・珠光、紹鷗、利休で完成した茶の精神は藤原定家の歌に尽きている。「見渡せは花も紅葉もなかりける うらのとまやの秋の夕暮」(茶の真髓)

・日本人は、海上、貿易、器械が得意だ。それ以上にあるのは美術である。これは横綱だ。どんな下層社会でも美術心おない者はいない。これは他の国にはない。・日本

人の絵は、人物でも何でもことごとく活動しているのが特質。(美術王国)

・日本人はドイツ人にはなれるがイギリス人にはなれない。イギリス人は花を捨てて実を取ることを始終考えている。(イギリス人に学べ)

益田の人物評が面白い。大隈。朝吹英二。松方。大山。原敬。原富太郎。桂。服部金太郎、

・渋沢栄一:何か困難なことが起こると、上州気質を出してあくまでやる。それに徳望が伴うものだから、どんな困難なことでもやり遂げる。何か新しい仕事をやるときはまず渋沢さんに相談した。

・野田宇太郎:通信大臣時代には朝4時頃に起きて客に会うまでの間に書類をすっかり読んでしまっていた。

・山縣公は何ごとにも用心深い。誰に対してもちゃんと物差しを当てていた。

健康法にも関心が深い。もともとはひ弱だった。

・健康を保ってきたのは、茶事の他は人の招待に行かないことが原因だ。食事の時刻が決まっており、分量に定めがあるからだ茶人はみんな長生きだ。茶人は何ごととも自分でやる。こまめに体を動かす。懐石では時節のものを食べる。

・食物。楽観。

・外気に触れる。100歳以上の生きた人を調べたら、皆外気に触れていた人であった。

・人間は歩くのがよい。一里半歩くことにしている。朝起きると自分で床を上げる。

・白砂糖はよくない。

2017年12月

山本周五郎「ながい坂(上)」(新潮文庫)

最晩年の『ながい坂』は、人生の長い坂を一步一步登っていく主人公の姿に周五郎の理念の影を見出すことができる作品。総ページ数は1000頁を超える長編小説。

志を持つ主人公をめぐる物語だが、登場人物の口を借りて周五郎の特徴ともいえるべき人生訓が随所に散りばめられている。

清廉潔白な主人公が泥にまみれながら成長していく物語。志を達成するかどうか、下巻を読みすすみたい。

「下巻」の文芸評論家・奥野健男の解説から。心して読みたい。

・自分の屈辱の運命をはねのけ、その下積みから這い上がって、まともに生きようとする人間の姿を描きたい。作者は一揆とか暴動とか革命とかいうかたちでなく、圧倒的に強い既成秩序の中で、一步一步努力し上がってきて、冷静に自分の場所を把握し、賢明に用心深くふるまいながら、自己の許す範囲で不正とたたかい、決して妥協せず、

世の中をじりじりと変化させてゆく、不屈で持続的な、強い人間を描こうと志す。

・学歴もないため下積みの大衆作家として純文壇から永年軽蔑されてきた自分が、屈辱に耐えながら勉強し、努力し、ようやく実力によって因襲を破って純文壇からも作家として認められるようになったという自己の苦しく苦い体験をふまえての人生観である。

・既成秩の内部における復讐と内部からの改革の物語なのだ。

・「おのれの来し方の総決算として『ながい坂』にとりかかりました。「私の自叙伝として書くのだ」とたいへんな意気込みでした。、、、そうです『ながい坂』こそ、山本さんの『徳川家康』であったのです。」(木村久に典)

・日本文学においてこのくらいロマンティズムを抑えた立身出世小説を、このくらい社会との関連において綿密に積み重ねられたビュルドウングス・ロマン(自己形成小説)をほかに知らない。

・それはそのまま今日の会社員、公務員などのサラリーマンの世界に通じている。自分のつとめている企業を全宇宙とし、その中で下積みから努力し、認められ責任ある地位につき、それをよりよく勇気をもって改革し、社業の発展に自己の理想と全人生を賭けるサラリーマンの切実な心情をと生き方がここに描かれている。

・『ながい坂』の主人公の生き方は、山本周五郎の作家、売文業者としての生き方、処世術の自叙伝だと思う。こういう細心な生き方をしながら、ついに裏街道や挫折から浮びあがることのできない貧しい庶民のあきらめに似た哀歓を、絶品ともいうべき短編にうたいあげている。

児玉博「テヘランからきた男ー西田 厚聡と東芝機械」(小学館)

イランで現地採用され、業績をあげて東芝という名門企業の社長になってアメリカの原子力事業を 6400 億円で買った栄光の経営者。であったはずだが、それが契機となって東芝は奈落の底に落ちこんでいく。異端の戦犯経営者の告白を中心とした東芝問題の実像を大宅賞作家が描いたノンフィクション。児玉さんは先週お会いした方。

この本は、企業の事業展開、人事、マネジメントについて考える恰好の材料だ。

・西田(1943年生まれ)という人物はいかなる人物か?「情報を集めるだけ集め、学び、考え、判断していく。これを繰り返す」「勉強家」「庶民的で気さくな性格」「負けず嫌い」「起床は4時半。集中」「情報を集めろ、重層的にしておけ」「営業にいく国の成り立ち、歴史、思想的背景、思想家、民族の英雄、、、」「常に、5-6冊の本を読む」「読書せよ」「就寝前には藤沢周平作品」「日本、世界を東京からではなく、パリやボンなどから見られることが必要」「どうしたらできるかを考える人」「1973年イランで現地採用」「経済、政治、文明、文化の知識、教養がビジネスで問われる」「学問の世界だけでは自分の人

生が実現できない」「時代に中におかれた個人」

・テヘランの現地採用から始まり社長になった西田の選択と集中とは？半導体事業に1.7兆(東芝メモリー)、WH買収に6千億という大胆な投資を行った。東芝セラミックス、東芝EMI、東芝不動産、銀座東芝ビルなどを売却した。

・東芝を絶望の淵に落とした原子力事業買収とは何か？ブッシュ政権による原子力リネッサンス。中国は2030年迄に原発140基建設。インドは現在の20基に加え30基以上の建設。2025年迄に170兆円に成長と予測。2030年迄にアジア・アフリカで156基の新規需要。世界潮流は加圧水型原子炉(PWR)。中国は2050年には500基導入を目指している。原発は安全保障と密接に結びついている。2011年の東日本大震災によってコストが大きくかかる構造になっていった。原子力事業を甘くみている。

・WH買収の実態？企業価値は2400億円。2700億円で落札。当初は最大4000億円と見込む。結果として6400億円で買収。WHはショー・グループから疑惑まみれのS&Wという建設会社をプット・オプション付き(ショーが売りたい時には東芝は買い取る)で買収。原発建設の遅延でWHとS&Wは深手の傷を負い、損失を流し続けた。しかし、東芝はそういう事態に眼をおおっていた。現地企業をマネジメントができなかった。

・西田会長と自らが後継指名した佐々木社長の確執:「社長室からどなり合う声」「選んだ者と選ばれた者が歯をむき出すようにして罵り合う」「顔を合わせない」、。人事抗争によって沈みゆく東芝を大物OBたちは見て見ぬふり。粉飾決算。つくられた数字で成り立つ会社へ。盟主が去った後の経営陣は烏合の衆と化した上場企業とは思えぬ体たらくをさらし続け、経営者会議は何も決められない。人事抗争と人物の払底。

東芝の石坂泰三、土光敏夫などがつとめた財界総理といわれる経団連会長職を望んだとされる異端の経営者によって、名門東芝という巨大企業が原子力という「神の火・悪魔の火」に関わる事業展開で転落するストーリーをロングインタビューで構成した優れたノンフィクションだ。

山本周五郎「ながい坂(下巻)」(新潮文庫)

山本周五郎が自身の自叙伝と言っているように、下積みから一步一步、ながい坂を登っていく主人公の物語だ。それは筆一本で這い上がってきた周五郎の人生である。直木賞を始め、あらゆる賞を辞退して、読者のみに向かって歴大な仕事をなした山本周五郎という作家のライフワークであろう。

奥野健男が巻末の「解説」で次のように述べている。

「作者は一揆とか暴動とか革命とか言うかたちで爆、圧倒的に強い規制秩序の中で、一步一步努力し上がってきて、冷静に自分の場所を把握し、賢明に用心深くふるまいながら、自己の許す範囲で不正と戦い、決して妥協せず、世の中をじりじりと変化させてゆく、不屈で持続的な、強い人間を描こうと志す。」

「おのれの来し方の総決算として『ながい坂』にとりかかりました。「わたしの自叙伝として書くのだ」とたいへんな意気込みでした。」

「学歴もないため下積みの大衆作家として純文壇から永年輕蔑されてきた自分が、屈辱に耐えながら勉強し、努力し、ようやく実力によって因襲を破って純文壇からも作家として認められるようになったという自己の苦しくにがい体験をふまえての人生観である。」

以下、私が共感する主人公の三浦主水主の考えや言葉。奥野健男のいうように、著者の人生観だと思う。

人間はその分に応じて働くのが当然である。

人も世間も簡単ではない、善悪と悪意、潔癖と汚濁、勇気と臆病、貞節と不貞、その他もろもろの相反するものの総合が人間の実体なんだ、世の中はそういう人間の離合相剋によって動いてゆくのだし、眼の前にある状態だけで善悪の判断は出来ない。

「人間のすることに、むだなものは一つもない」と主水正は云った。「眼に見える事だけを見ると、ばかげてイタリ徒労だと思えるものも、それを繰返し、やり直し、つみかさねて行くことで、人間でなければ出来ない大きな、いや、値打ちのある仕事を作りあげられるものだ、、、」「人間は生まれてきてなにごとかをし、そして死んでゆく、だがその人間のしたこと、しようと心がけたことは残る」

いちばん大切なのは、その時ぼったりとみえることのなかで、人間がどれほど心をうちこみ、本気で何かをしようとしたかしないか、ということじゃあないか、、、」

人間はどこまでも人間であ利。弱さや欠点を持たない者はいない。ただ自分に与えられた職に責任を感じ、その職能を果たすために努力するかしないか、というところに差ができてくるだけだ。

しかし、今日まで自分は自分の坂を登ってきたのだ、と彼は思った。「そして登りつめたいま、俺の前にはもっと険しく、さらに長い坂がのしかかっている」と主水正はまた呟いた、「そして俺は、死ぬまで、その坂を登り続けなければならないだろう」

浜口雄幸「随感録」(講談社学術文庫)

城山三郎『男子の本懐』で知られるライオン宰相浜口は土佐高知生まれ。1929年に総理就任後、金解禁、中国関税自主権の承認、ロンドン海軍軍縮条約の締結など困難な課題に取り組んだ。大蔵省に入るが、上司への直言のため、山形、松山、熊本など地方勤務を余儀なくされている。昭和恐慌のさなか、浜口は東京駅で銃弾に倒れる。その時、苦しい呼吸の下から「男子の本懐だ！」と言っている。それが城山三郎の小説のタイトルとなった。

また、浜口は後藤新平から目をかけられ、満鉄理事の就任を望まれるが固辞し、次に後藤が逓信大臣になった時には次官に就任する。そして浪人生活中に、後藤の感ゆ

うで立憲同志会に入党し政党政治家への道を歩んでいる。浜口は熟慮した上で、自己の意志を貫いており、出处進退に悔いることはないと言っている。

幣原外交と井上財政と呼ばれる政策を首相として断交した。この本の「自序」では、「建艦競争の危険防止と、国民負担の軽減とを、二つながら成功せしめたことは、聊か余の満足するところである」と触れている。その浜口は修養上の参考を目的として著したのが本書だ。

以下、本文から。

・議会の弁論に於いて、、、攻撃は難く防御は易い、、攻撃演説の場合に於いては、、、政府軍の金的に命中せしめなければ成功とは言えない、否、少なくとも五分以上の相撲を取らねば攻撃軍の敗戦、、、。

・第一に余は生来極めて平凡な人間である。唯幸いにして余は余自身の誠で平凡な人間であることをよく承知して居た。平凡な人間が平凡なことをして居たのではこの世において平凡以下の事しか為し得ぬこと極めて名涼である。

・政治の目的は、国民の物質的生活を充実せしむると共に、更に進んで其の精神的生活を充実せしむるにあらねばならぬ。

・緊張せる心の力と、緊張せる肉体の力との共働的活動に依って、人間というものに摩訶不思議なる大きな事業が出来るものである。

・多読濫読よりは、斯道の権威者の力作一又は二を、徹頭徹尾精読数回に涉って十分に之を頭脳に消化するに如かずと思う。

・問題は最後の五分間だ。そこが最も大切な処だ、うんと踏ん張るべし、、、。公人が公事に臨むや、終始一貫、純一無雑にして、一点の私心を交えないことである。

・偉人は凡人の修養の結晶物であり、大業は其の偉人の努力の結晶物である。

・『碧巖録』

・一発の銃声と共に 61 歳の浜口雄幸は死んだのである。之と同時に第二の浜口雄幸なるあらたな生命が生まれたのである。